岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 147

道面遺跡・塚地古墳

県道矢掛寄島線改良事業に伴う発掘調査２

１９９９

岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 147

道面遺跡・塚地古墳

県道矢掛寄島線改良事業に伴う発掘調査２

１９９９

岡 山 県 教 育 委 員 会

1　塚地古墳横穴式石室（南から）

2　塚地古墳出土金属器

序

岡山県の交通大動脈である新幹線・高速自動車道の建設は、平成９年３月の岡山自動車道の開通でほぼ完成をみました。この高速交通網を県民生活の向上に結びつけるためには、それらに直接乗り入れる地方道路の整備が次ぎなる課題となります。県道矢掛寄島線は山陽自動車道鴨方インターチェンジに直結することから、岡山県南西部の幹線道路として主要地方道に位置づけられていますが、矢掛町と鴨方町との間には遥照山山系が連なっていて、交通の難所となっています。このことから、この区間についての整備事業が早期に実施されることになりました。

工事に先立ち、鴨方町内の計画路線内に所在した２カ所の弥生時代の散布地と１基の古墳については、やむをえず記録保存の措置をとることで事業担当部局と合意し、このうち、地頭上段林地区の遺跡については平成９年度に発掘調査を終え、その成果を『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』132 として刊行したところです。ところが、平成９年12月に事業用地内にかかって古墳１基が新たに発見され、再度の事業担当部局との協議の結果、これについても塚地地区の弥生時代の遺跡とともに記録保存の措置をとることになりました。

発掘調査の結果、弥生時代の遺跡は集落跡で、その一端を明らかにすることができました。この地方では山上に所在する集落が目立っていますが、その実態を探る上で一つの例証を示すこととなりました。また、古墳については、鴨方町内では有数の大規模な横穴式石室を埋葬施設にもち、山陽自動車道の建設に伴って調査された宮の脇古墳と同規模で、近接する２基の有力な古墳の内容が明らかになったことは今後の地域史の解明にとって大きな成果といえるでしょう。幸いにして、この塚地古墳は、地元の方々の強い御要望と事業主体者の深い御理解により、現地において保存されることが決まりました。御尽力いただいた方々に厚く感謝申し上げます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたりましては、私有地内の発掘を快諾下さいました地権者をはじめとして、調査に参加協力いただきました地元の方々にお礼を申し上げますとともに、種々の便宜を図っていただきました岡山県井笠地方振興局建設部工務第一課ならびに、暖かい支援を頂戴しました鴨方町教育委員会の皆様に深く感謝致します。

本書が埋蔵文化財に対する理解の一助として、また、郷土史を解明する資料として、いささかなりとも貢献でき得れば幸いです。

平成11年11月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　葛　原　克　人

例　　言

1　本書は、県道矢掛寄島線改良事業に伴い岡山県教育委員会が実施した道面遺跡・塚地古墳の発掘調査報告書である。

2　道面遺跡・塚地古墳は岡山県鴨方町地頭上1444－2に所在し、遺跡名は小字名をとって命名した。

3　発掘調査については、岡山県井笠地方振興局からの分任事業として、岡山県教育委員会が調査主体者となり、調査実務は岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

4　発掘調査は平成10年（1998年）11月１日から平成11年（1999年）１月14日まで実施し、岡山県古代吉備文化財センター職員　岡本寛久・加藤和歳が担当した。調査面積は道面遺跡が380㎡、塚地古墳は160㎡である。

5　報告書作成作業は平成11年１月15日から同年３月31日まで岡山県古代吉備文化財センターにおいて行い、引き続き岡本・加藤が担当した。

6　報告書の作成にあたり、遺構の浄写は加藤が、遺物の浄写は岡本が担当し、遺物の写真撮影については江尻泰幸の協力を得た。

7　本書の編集と執筆は岡本が担当した。

8　出土遺物・図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

9　塚地古墳出土の耳環２点については、徳島県立博物館学芸員　魚島純一氏によって蛍光Ｘ線分析を実施していただいた。感謝申し上げる。

凡　　例

1　本書第２図は建設省国土地理院発行の５万分の１地形図（玉島）を複製・加筆したものである。

2　掲載図の方位は第１図～第４図が真北、それ以外は磁北を示す。調査遺跡周辺の磁北は西偏約６°50′である。

3　本書に記載した高度値は海抜高度である。

4　遺物番号は遺跡の相違にかかわらず、本書全体で材質別の通し番号とし、土器は番号のみ、石器には番号の前にＳ、金属器には同じくＭを付した。

5　掲載図の縮尺は個々に表示しているが、遺物については土器が1/4、石器・金属器は原則として1/2に統一している。

6　土器実測図の口縁上端線または、底部下端線で、中軸線の両側を一部欠いているものは、小片のために口径・底径の計測値が不確実なものである。

7　土器に丹が塗られている場合は、塗布部分にトーンをかけて表現している。

8　出土土器の編年と時期区分については、山陽自動車道建設に伴う発掘調査を実施した津寺遺跡の調査報告書に準拠した。詳しくは報告書を参照されたい。

　高畑知功ほか『津寺遺跡５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127　岡山県教育委員会　1998年

9　本書の記述に使用した時代区分は一般的な政治史区分に準拠した。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第1章　遺跡の位置と環境 …… 1
第2章　調査の経過 …… 5
　第1節　調査の契機 …… 5
　第2節　調査の経過 …… 6
第3章　道面遺跡 …… 13
　第1節　概要 …… 13
　第2節　遺構と遺物 …… 13
　　1　竪穴住居 …… 13
　　2　柱穴列 …… 16
　　3　貯蔵穴 …… 17
　　4　柱穴群 …… 19
　　5　土器溜まり …… 19
　　6　遺構に伴わない遺物 …… 23
第4章　塚地古墳 …… 24
　第1節　遺構 …… 24
　　1　立地 …… 24
　　2　墳丘 …… 25
　　3　石室掘り方 …… 27
　　4　横穴式石室 …… 27
　第2節　遺物 …… 29
　　1　遺物の出土状態 …… 29
　　2　土器 …… 29
　　3　金属器 …… 32
　　4　弥生土器 …… 34
　　5　中世土器 …… 34
第5章　まとめ …… 36
　第1節　道面遺跡について …… 36
　第2節　塚地古墳について …… 37
報告書抄録 …… 38

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　調査遺跡周辺遺跡分布図 …… 2
第３図　調査区および周辺地形図 …… 5
第４図　第１次～第３次調査区位置図 …… 6
第５図　塚地古墳調査区調査後地形測量図 …… 7
第６図　塚地古墳調査区南壁土層断面図 …… 8
第７図　塚地古墳調査区Ｋ－Ｌトレンチ南壁土層断面図 …… 9
第８図　塚地古墳石室内土層断面図 …… 10
第９図　塚地古墳調査区Ｍ－Ｎトレンチ東壁土層断面図 …… 10
第10図　道面遺跡調査区遺構配置図 …… 11
第11図　第１地点出土土器 …… 13
第12図　竪穴住居１ …… 14
第13図　竪穴住居２ …… 15
第14図　柱穴列１・出土土器、貯蔵穴１ …… 16
第15図　貯蔵穴１ …… 17
第16図　貯蔵穴１出土土器 …… 18
第17図　第２地点柱穴群・出土土器 …… 18
第18図　第４地点柱穴群 …… 19
第19図　土器溜まり１平面図 …… 19
第20図　土器溜まり１出土土器（１） …… 20
第21図　土器溜まり１出土土器（２） …… 21
第22図　土器溜まり２平面図 …… 21
第23図　土器溜まり２出土土器 …… 22
第24図　道面遺跡出土弥生時代石器・土器 …… 23
第25図　道面遺跡出土中世土器 …… 23
第26図　塚地古墳調査後地形測量図 …… 24
第27図　塚地古墳墳丘断面（Ｉ－Ｊ）土層図 …… 25
第28図　塚地古墳石室掘り方平面図・土層断面図 …… 26
第29図　塚地古墳横穴式石室 …… 28
第30図　塚地古墳石室内遺物出土状態平面図 …… 30
第31図　塚地古墳出土須恵器・土師器 …… 31
第32図　塚地古墳出土金属器 …… 33
第33図　塚地古墳出土弥生土器 …… 34
第34図　塚地古墳出土中世土器 …… 35

図版目次

巻頭図版　１塚地古墳横穴式石室（南から）　２塚地古墳出土金属器
図版１　道面遺跡　１遺跡遠望（北西から）　２段林地区（左）・塚地地区（右）遠望（北西から）　３調査前全景（東から）
図版２　道面遺跡　１調査区東半全景（南西から）　２竪穴住居１（東から）
図版３　道面遺跡　１竪穴住居２（北西から）　２貯蔵穴１検出状況（上 南東から）・完掘状況（下 西から）
図版４　道面遺跡　１柱穴列１（北西から）　２土器溜まり１（北西から）　３土器溜まり２（北西から）
図版５　道面遺跡　１貯蔵穴１出土土器　２土器溜まり１出土土器
図版６　道面遺跡　１土器溜まり１出土土器　２土器溜まり２出土土器　３道面遺跡出土土器・石器
図版７　塚地古墳　１調査前全景（上 西から・下 北西から）　２古墳全景（北から）
図版８　塚地古墳　１天井石（東から）　２調査区西壁土層（南東から）　３石室掘り方全景（北から）
図版９　塚地古墳　１石室掘り方細部（北東から）　２横穴式石室東側壁前方（西から）　３横穴式石室西側壁前方（東から）
図版10　塚地古墳　１横穴式石室奥壁（南から）　２横穴式石室東側壁（南西から）　３横穴式石室西側壁（南東から）
図版11　塚地古墳　１石室内奥部遺物出土状態（南から）　２石室内前方部遺物出土状態（北から）　３土師器高杯・鉄刀出土状態（東から）
図版12　塚地古墳　１石室内出土土器

第１章　遺跡の位置と環境

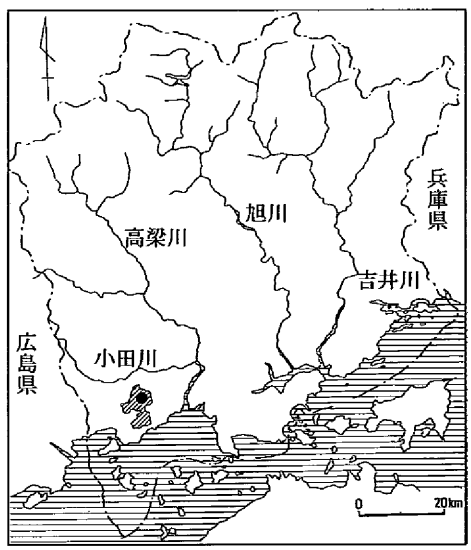
道面遺跡・塚地古墳（１）は岡山県浅口郡鴨方町地頭上に所在している。鴨方町は岡山県の南西部に位置し、北は小田郡矢掛町、東は浅口郡金光町、南は浅口郡寄島町、西は浅口郡里庄町・笠岡市と接している。寄島町は瀬戸内海に面し、また、金光町の東部に位置する占見新田は、17世紀中頃以前には里見川の河口付近のデルタ地帯であり、平安時代にまで遡ると、海は東からさらに鴨方町中央部よりに深く進入していたと推定される。

鴨方町北部の矢掛町・笠岡市境には海抜405.5ｍの遙照山から竹林寺山、そして阿部山と続く遙照山山系が連なり、南下する尾根筋の間を東から益坂川・本庄川・杉谷川などの小河川が流れている。鴨方町中央部の北端には海抜168.2ｍの鴨山を中心とする独立丘陵があり、前記の小河川が合流しつつ、その北から東側を巡り、各河川の谷底部から連続する平野を流域に形成している。合流後の川は鴨方川と呼ばれる。遙照山と竹林寺山との間の地蔵峠から本庄川に続く谷は断層線谷といわれ、この線を南西に延長すると本庄から小坂西にかけての狭長な平野部に繋がる。山陽自動車道はこの平野部を東西に走っている。道面遺跡・塚地古墳はこの平野部に連なる本庄川の上流域に位置している。

鴨方町南部の丘陵地では、寄島町境に海抜289.4ｍの竜王山を主峰とする寄島山地が広がり、その北に断層線谷を挟み、海抜221.1ｍの泉山を中心とする泉山山塊が北東から南西に連なっている。この南部丘陵地帯の東西には南北方向に平野部が発達し、現在の地名で言えば、東の平野部は六条院東・六条院中に属し、西の平野部は六条院西にあたる。六条院東の平野を流れる堅川は、寄島山地と泉山山塊の間の山王峠から東流し、四条原の盆地で流路を北に変える。六条院西の平野部は寄島山地の西を抜け、やがて海岸に達する。この平野には鳩岡川が北流している。南部丘陵地帯の北辺と鴨方中央部南端の赤鉢山や丁山などの低丘陵地との間には地溝帯があり、現在のＪＲ山陽本線や国道２号が走っている。この地溝帯を里庄町から発した里見川が東へ流れ、まず鳩岡川と合流し、ついで堅川を入れ、さらには鴨方川とも一つになって、金光町から倉敷市玉島まで達して海に注ぐ。

中央部には、北・西・南三方を丘陵に囲まれた低位部に近世以降の鴨方の中心部が存在している。鴨山の南東裾と言うこともできる。ここから東に低地帯が里見川の北岸沿いに金光町占見新田まで連続している。

鴨方地域と他地域を結ぶ古くからの通路としては、まず現在の県道矢掛寄島線となっている、本庄川を遡って地蔵峠を越えて矢掛町南山田に下る道があり、道面遺跡・塚地古墳はこの道に面している。南部では六条院東から南へ安倉峠を抜けて寄島町東安倉の海岸沿いに出る通路がある。東西では、益坂川を遡って金光町上竹へ出る通路が東部にあり、西部では小坂西の大内から大内峠を越え、笠岡市尾坂へ至る道路がある。この東西通路は現在の備南広域農道の路線となっている。また、大内峠の路線よりは古いとさ



第１図　遺跡位置図

● 古墳　▲ 窯跡　卍 寺院跡　凸 城跡

1　道面遺跡・塚地古墳
2　和田遺跡
3　向原遺跡
4　段林遺跡・段林古墳
5　加賀池遺跡
6　犬飼本谷遺跡
7　奥の原遺跡
8　赤鉢遺跡
9　阿部山遺跡
10　竹林寺天文台遺跡
11　地蔵峠遺跡
12　七原山遺跡
13　鴻之巣山遺跡
14　向山１号墳
15　光林房遺跡
16　安芸守山西南麓３号墳
17　鴨山石槌塚古墳
18　算用ヶ岡塚古墳
19　侍山塚古墳
20　坪古墳
21　天神山塚古墳
22　真戸止山下原塚古墳
23　向ケ市塚古墳
24　宮の脇古墳
25　下名口２号墳
26　阿坂古墳
27　片山２号墳
28　地頭上八幡塚古墳
29　占見廃寺
30　鴨山城跡

第２図　調査遺跡周辺遺跡分布図（1/50000）

れるものに小坂東の日原から尾坂に出る道もあり、矢掛・井原・笠岡に通じる。

鴨方町の地質基盤は、遙照山山系が中生代白亜紀に形成された流紋岩からなり、山系の南端からそれ以南の全域は白亜紀末に貫入した花崗岩からなっている。花崗岩の表層は風化が進行している。

鴨方町周辺における人間活動の痕跡は旧石器時代後期に遡る。笠岡市分の阿部山からは小形のナイフ形石器が採集され（註１）、鴨方町益坂の和田遺跡（**2**）（註２）からは有舌尖頭器とみられる石器片が出土している。これらの遺跡は鴨方町中央部の低地帯を望む丘陵部に位置していて、平地に集まる獣を狩猟の主要な対象としていたものであろう。

縄文時代になると海面の上昇が始まり、鴨方町の中央部まで海が進入していたと考えられる。鴨方町内には現在まで貝塚の存在は知られていないが、周辺地域には倉敷市中津貝塚や笠岡市津雲貝塚のような大規模な貝塚がある。益坂和田遺跡からは縄文時代の石器が出土し、隣接する向原遺跡（**3**）からは後期の土器片が出土している（註２）。地頭上段林遺跡（**4**）（註３）や小坂東の土井谷（註１）からも後期の土器片が採集され、鴨方町内の遺跡は小規模な散布地が主体のようで、金光町加賀池遺跡（**5**）（註４）も同様の散布地と考えられる。倉敷市玉島道口から金光町上竹にかけて縄文時代後期の散布地が点々と分布し（註５）、この路線は鴨方町益坂に連絡している。大規模な貝塚遺跡を拠点的な集落とし、周辺の山間部を移動しつつ、狩猟・採集活動を繰り返す生活が想像される。

弥生時代前期の木葉文土器片が鴨方町小坂東犬飼本谷遺跡（**6**）から出土している（註１）が、同町内の他の弥生時代遺跡はほとんどが中期以降のものである。とくに中期後葉から遺跡が急増し、鴨方町内全域に分布するようになる。遺跡の立地をみると、平地に面する低丘陵部にあるものと、急峻な山上付近に位置するものに二分される。前者の遺跡としては六条院東奥の原遺跡（**7**）・六条院中赤鉢遺跡（**8**）・益坂向原遺跡などがあり、後者の遺跡では小坂東阿部山遺跡（**9**）・本庄竹林寺天文台遺跡（**10**）・本庄地蔵峠遺跡（**11**）・小坂西大内七原山遺跡（**12**）などが知られている。山上の遺跡については高地性集落と呼ばれ、非常時に備えた防御的・一時的な集落と捉えられることが多いが、鴨方町の場合は一般的な小規模集落と考える説（註１）もある。道面遺跡や段林遺跡は遙照山山系の先端に位置し、両者の中間的な位置を占めている。弥生時代の社会発展に伴い、鴨方地域でも集落の組織化が進行し、やがて有力者集団が生み出されてくる。益坂和田遺跡では終末期の木棺墓群が検出され、玉類を副葬し、特殊器台形土器を供献した首長の墓が確認されている。

古墳時代前期の鴨方町内の古墳はいずれも小規模で、被葬者は古墳が所在する周辺の平野部を基盤とする支配者層と考えられ、鴨方地域全体を統括するような古墳は域内には存在していない。六条院東鴻之巣山遺跡（**13**）は初期の古墳とみられ、山頂から近畿地方の庄内式土器と類似する土器群が出土し、和田遺跡の木棺墓群と類似した遺跡とみられている（註１）。これに続く４世紀後半から５世紀にかけての前期古墳は箱式石棺を埋葬施設にしたものがほとんどで、小坂東宇月原向山１号墳（**14**）・地頭上光林房古墳（**15**）・益坂安芸守山西南麓古墳群３号墳（**16**）・鴨方鴨山石鎚塚（**17**）・六条院中算用ヶ岡塚（**18**）・六条院中侍山塚（**19**）など町内全域に分布し、少数の鉄器や土器が出土している（註１）。また、益坂安芸守山西南麓古墳群２号墳は埋葬施設が竪穴式石室と推定され、本庄坪古墳（**20**）からは乳文鏡が出土している（註１）。

横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳も町内の全域に所在するが、とくに石室の規模の大きな古墳として、六条院中天神山塚（幅2ｍ）（**21**）・六条院中真戸止山下原塚（幅1.75ｍ）（**22**）・六条院東向ヶ市塚（幅1.75ｍ）（**23**）・益坂宮の脇古墳（幅1.8ｍ）（**24**）・本書の地頭上塚地古墳（幅1.8ｍ）など

がある。また、出土遺物についてみると、本庄下名口２号墳（**25**）からは馬具が出土し、塚地古墳にも馬具の断片があり、宮の脇古墳には金銅製の大刀や釧が副葬されていた（註２）。これらの古墳の分布をみると、本庄川から鴨方川にかけての流域平野部と堅川流域四条原盆地の二地域に分かれて有力な支配者層が存在していたとみられる。堅川流域の古墳については未発掘のために確実なことはいえないが、鴨方川流域の古墳の副葬品に注目されるものがある。地頭上八幡塚（**28**）は終末期の古墳とみられ、竪穴式石室を埋葬施設とし、飛鳥時代の須恵器が出土したと伝えられている（註１）。

古墳時代後期から古代にかけて、倉敷市玉島陶から金光町上竹・須恵にかけての一帯は窯業の一大生産地となる。鴨方町六条院東地頭明の焼山でも７世紀の須恵器窯跡が発見され（註１）、窯業地帯の一角を占めていたことが知られる。一方、益坂和田遺跡からは製鉄に伴うとみられる炭窯が検出され（註２）、一帯が花崗岩地帯であることから、製鉄も行われていたことが推測される。

鴨方町に接する金光町小三宅・大三宅の地に屯倉が設置されたという説があり（註６）、ここを中心にして、鴨方町鴨方から金光町占見にかけての低位部には条里制地割りの痕跡が残されているといわれる（註７）。六条院東や六条院西・小坂東・小坂西など鴨方町の平野部全域で条里制地割りが確認されるという。古代には、高梁川以西の瀬戸内海沿岸は、小田郡とされた笠岡市の大部分を除き、浅口郡に編入される。『和名類聚抄』では浅口郡には八つの郷があったとされるが、そのうち鴨方町に関係するのは川村郷・小坂郷・大嶋郷とみられる。川村郷は地頭上・益坂・本庄・鴨方・深田に、小坂郷は小坂東・小坂西に、大嶋郷は六条院東・六条院中・六条院西に比定されている（註８）。

７世紀以降、仏教が本格的に導入されていくが、鴨方地方でも早くから仏教に関係した遺跡が知られている。金光町占見には７世紀後半の白鳳期に創建された占見廃寺（**29**）があり（註９）、創建軒丸瓦は総社市栢寺廃寺出土のものと同型で、備中の中心部との直接的な結び付きが考えられる。鴨方町益坂阿坂からは奈良時代の火葬骨蔵器とみられる須恵器の壺が出土し（註６）、この地域の人々の生活にも仏教が浸透していた様子をうかがわせる。遙照山からは奈良時代の瓦片が出土し、そのうち単弁16弁軒丸瓦は平城宮6225系の瓦で、矢掛町毎戸遺跡出土のものと同じである（註６）。古代の山陽道は総社市から矢掛町を経由して井原市を通過する小田川流域にあり、毎戸遺跡は駅家跡と推定されている。『延喜式』によれば、遙照山には蓮厳寺という山上寺院があり、備中国から正税一千束の保護を受けていたとある。寺院の建立にあたって公的な援助が加えられたことも考えられる。これ以降、遙照山は備中国内における一大宗教聖地となり、中世に至っても繁栄を極めたという。

註

（１）間壁忠彦「第二章　郷土のあけぼの」『鴨方町史』本編　鴨方町　1990年
（２）伊藤晃・浅倉秀昭・江見正己『山陽自動車道建設に伴う発掘調査２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42　岡山県教育委員会　1981年
（３）小林利晴・内藤善史『段林遺跡・段林古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告132　岡山県教育委員会　1998年
（４）伊藤晃・池畑耕一「第Ⅶ部　加賀池・宮地池遺跡および益坂散布地の調査」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告２　岡山県教育委員会　1974年
（５）藤田憲司・中山頼夫「倉敷市玉島地区とその周辺の新発見縄文時代資料」『倉敷考古館研究集報』18　倉敷考古館　1984年
（６）中山薫・間壁忠彦「第三章　ひらけゆく鴨方」『鴨方町史』本編　鴨方町　1990年
（７）永山卯三郎『岡山県通史』岡山県　1930年
（８）斎藤伸英・石田省三・佐藤清明「第一章　鴨方の風土」『鴨方町史』本編　鴨方町　1990年
（９）鎌木義昌「岡山県浅口郡占見廃寺址」『日本考古学年報』２　誠文堂新光社　1954年

第２章　調査の経過

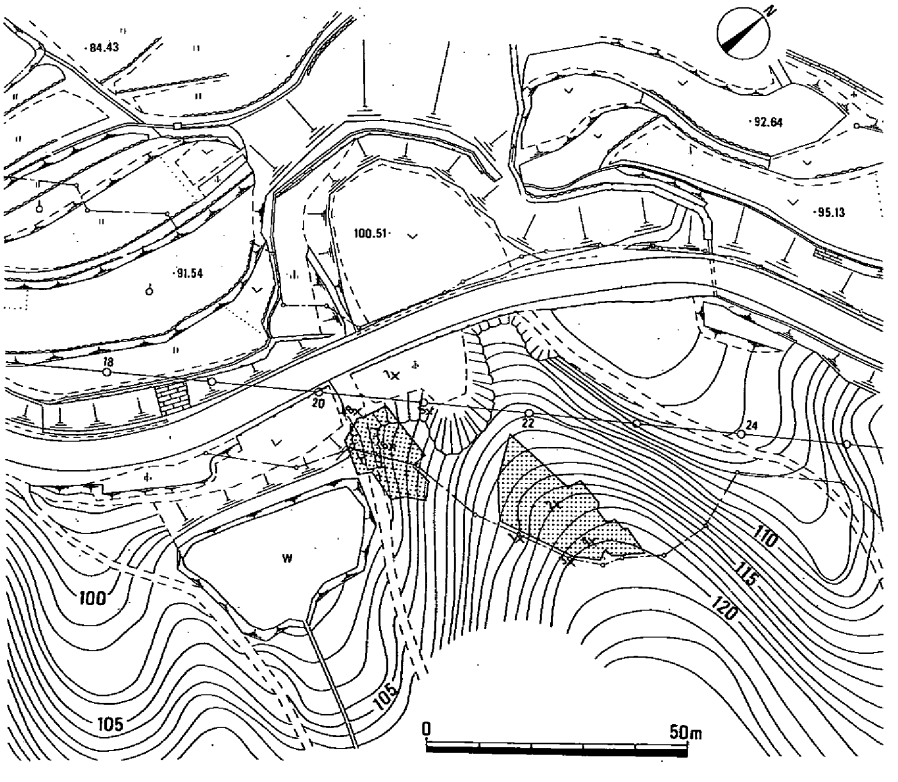
第１節　調査の契機

県道矢掛寄島線（64号）は矢掛町から南へ発し、鴨方町を経て寄島町に至る。矢掛町と鴨方町の間には遙照山山系が連なり、峠越えの道は交通を困難にしていた。この路線は山陽自動車道鴨方インターに接続することから主要地方道に位置づけられ、その整備は地域の発展にとって緊急な課題となっていた。岡山県は平成５年度から地方特定道路整備事業として矢掛寄島線の改良事業に着手し、遙照山下にトンネルを掘削するとともに、山地部分の路線の変更や拡幅を行うこととした。

鴨方町内の改良事業にかかる地域については、『岡山県遺跡地図』で弥生時代の散布地が知られていたため、平成８年５月30日付けで井笠地方振興局長から発掘通知が提出された。これを受けて岡山県教育庁文化課では、従来の遺跡の範囲が不明瞭で、また、周辺にも遺跡地と類似した地形が複数認められたことから、第４図のように試掘溝（トレンチ）による第１次調査を実施することとした。調査の結果、段林地区から古墳が１基と弥生時代の遺構が検出され、また、周知の塚地地区でも弥生土器を伴う柱穴が確認された。第１次調査の結果を踏まえ、県文化課と井笠地方振興局工務第一課との間で遺跡の取り扱いについて協議が行われ、いずれも記録保存の措置をとることで合意した。

第２次調査は平成９年７月16日から開始した。当初はすべての遺跡の調査を行う予定であったが、用地買収の交渉が遅れたため段林地区のみの調査を実施し、９月12日に終了した。引き続いて、同年度中に調査報告書の作成作業に着手し、平成10年３月31日に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』132として発行した。

この間の平成９年12月12日に、塚地地区で土取り作業中の重機が横穴式石室の天井石を引っかけ、古墳の存在することが新たに知られることとなった。その一部が道路改良事業

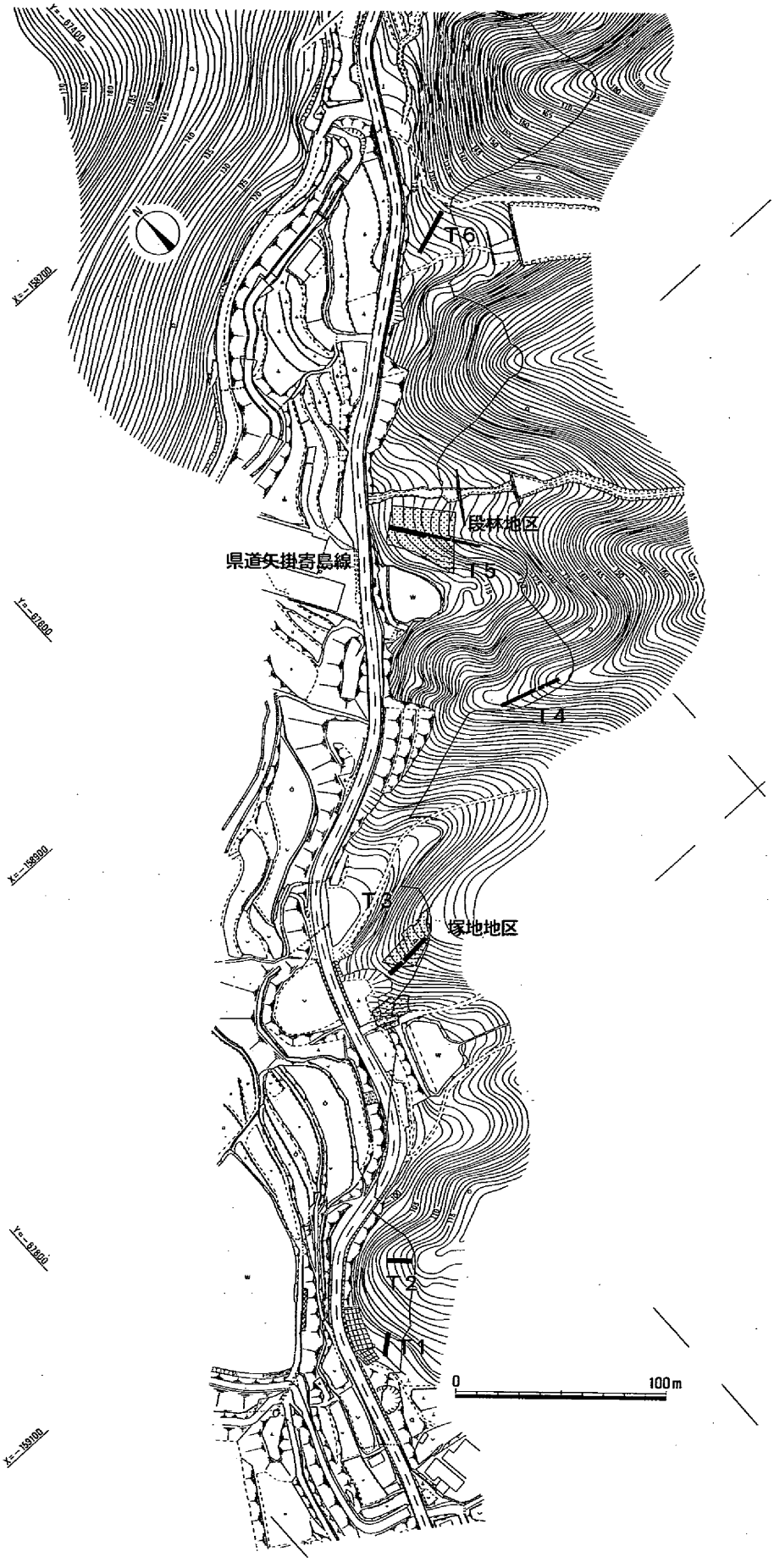


第３図　調査区および周辺地形図(1/1500)

の用地内に含まれていたために保存協議を行ったが、平成10年度に実施する第３次調査で、尾根筋の遺跡とともに記録保存の措置をとることとなった。古墳は石室も用地の内外で二分されるような状況にあり、用地内のみの調査は実質的に困難で、学術的にも石室内全体の調査が望ましいと判断された。このため、古墳の所在する用地外の部分についても地権者の承諾を得て、発掘調査を実施することとした。なお、尾根筋の遺跡は小字名をとって道面遺跡と改称し、古墳は塚地古墳と呼ぶ。

第２節
調査の経過

発掘調査は塚地古墳から始めた。西へ伸びた尾根筋の南斜面を削った土取り場があり、その南東隅で古墳は検出された。南側の谷には溜池が造られていて、古墳の位置は溜池の堤防が丘陵と取り付く地点に接していた。土取り場の南東隅からは谷筋を遡る山道が続いているが、その接点付近には扇形に広がった平坦面が認められ、尾根裾も急斜面で古墳の周溝を思わせた。

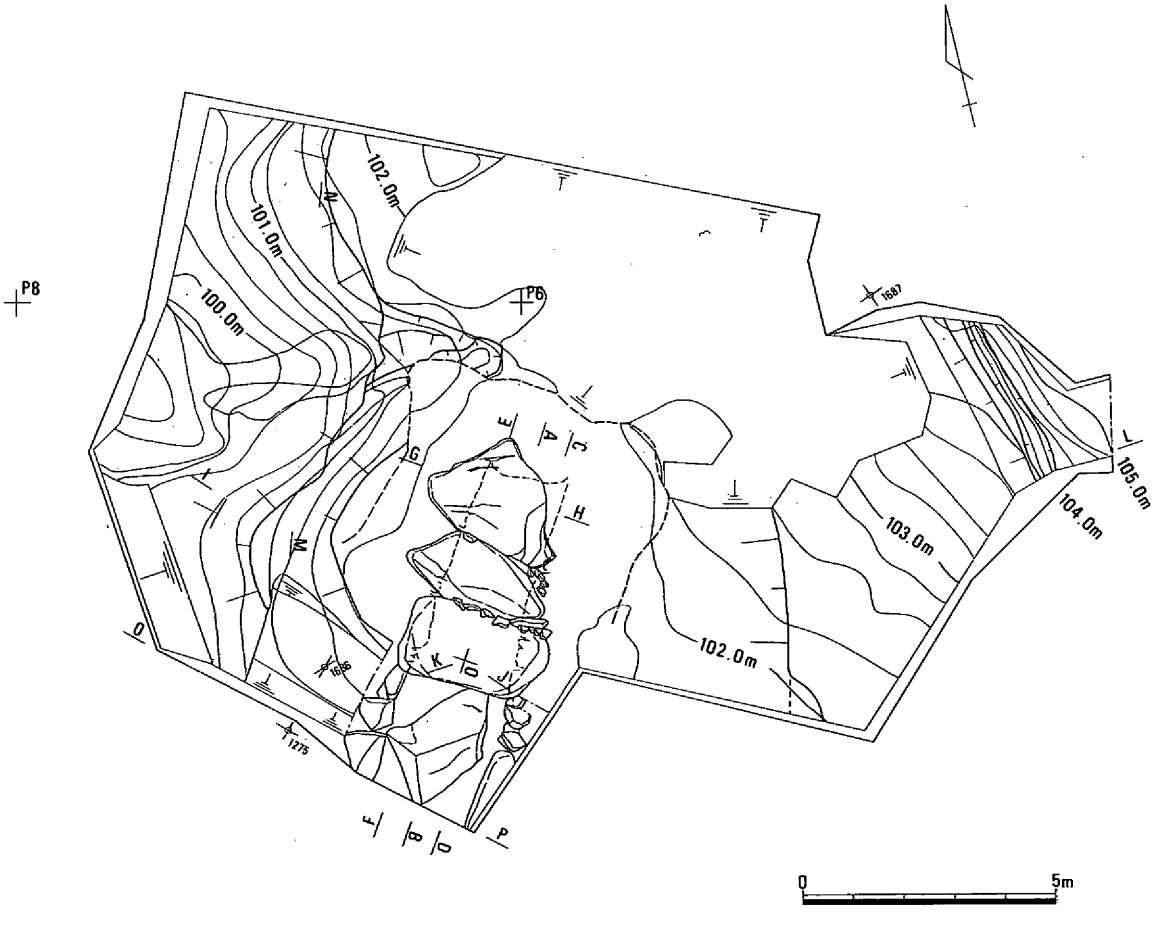


第４図　第１次～第３次調査区位置図(1/3000)

まず墳丘の残存状況を確認するため、土取り場の南辺に沿った方向（Ｉ－Ｊ）と扇形の平坦面を通って尾根裾の斜面に向かう（Ｋ－Ｌ）二方向のトレンチを設定して掘り下げを始めた。同時に、天井石を掘り出す作業にも着手し、天井石の上部から周辺にかけて灰色の締まった粗砂の層を検出した。二本のトレンチの下部でもこの土層を確認したため、当初はこの土層を封土と考えていた。

天井石が三枚検出された。もっとも奥の石がずらされていたが、被害は軽かった。石室の方向が明確になり、開口部は堤防下に埋没していた。調査区の南端まで天井石があり、石室内への進入口がなかったため、検土杖で確認して調査区を南へ４ｍほど拡張し、進入口を得た。拡張区を掘り下げると、石室内に転落した四枚目の天井石を確認した。石室の側壁は拡張区の端まで続いていたが、それ以南の掘削は堤防に影響を及ぼすと判断し、さらなる拡張は断念した。したがって、今回の調査は石室の開口部付近から前庭部についての調査を欠くこととなった。調査区に接した堤防裾で一端が露出した石材を認めた。すこし掘り出すと長めの大石とみられ、落下した五枚目の天井石と推定した。

調査区南壁の土層断面では、転落した天井石を基礎に据え、堤防の核となる土が堤防中央へ高まっていた。前述の灰色粗砂層は第６図第８層で、その状況から堤防の堆積土と判断された。溜池を底ざらえした土であろうか。この層を除去した天井石の露出した段階が、溜池築堤時の古墳の姿であったと考えられる。Ｋ－Ｌトレンチの底、第７図第23層がこの粗砂層で、結局、丘陵裾部平坦面はすべて築堤後の堆積層であった。堤防の築土として古墳の封土を利用した可能性も考えられる。



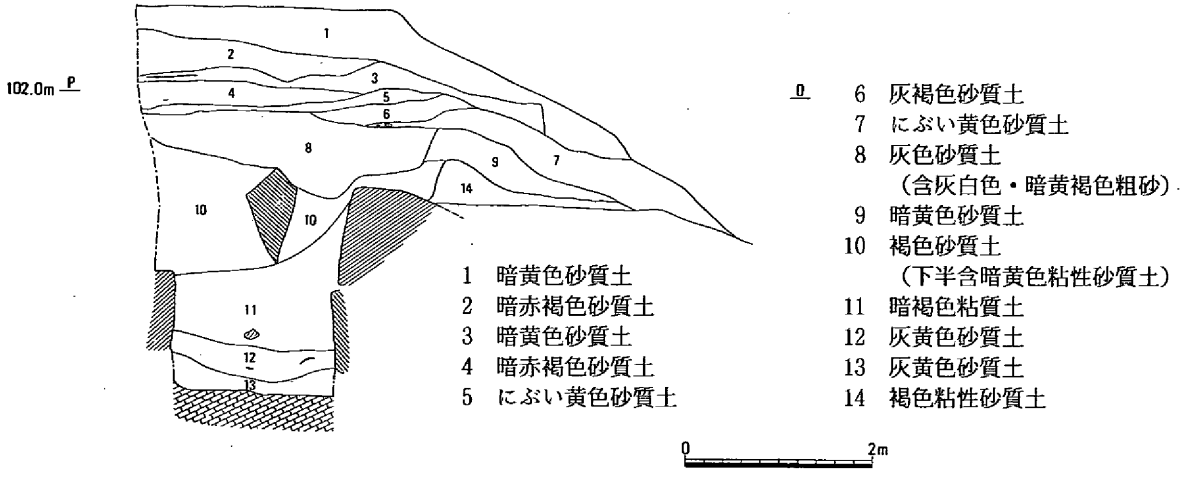
第５図　塚地古墳調査区調査後地形測量図(1/150)

天井石の転落部分から石室奥部にかけては、石室の埋土が斜面となっていた。破壊せずに残した石室奥半分の開口部分を塞ぐために土を入れたとみられる。埋土の上面にはやはり灰色粗砂層（第８図第２層)が堆積していた 。開口部分の築堤以後の堆積土を掘り下げると、底で広範な炭（第８図第10層）の広がりが認められた。この炭層を挟んだ土層の境界面は石室内ではほぼ水平にひろがり、奥部でも炭や中世土器片の集中がこの面上でみられた。この面から下の土層は遺物や礫を含んだ包含層として大きく一括して取り扱うことができた。包含層の底は地山の岩盤となり、石室奥部では深い抉れが存在した。このような地山の状況や遺物の散乱状態から判断して、包含層は後世の攪乱層で、古墳時代の埋葬面は残存していないと結論づけた。遺物と礫の出土状態を計測し、写真撮影の後、順次遺物を取り上げた。床面は地山岩盤まで掘り下げ、石室の図面を取って石室内の調査を終了した。

この間、調査の進行にしたがって、石室の規模が大きく、遺存状況も良好であることが明らかとなってきた。また、石室の位置も一部が計画路線の歩道にあたる程度であったため、地権者をはじめ、地元から石室保存の要望が高まってきた。そこで、県教育庁文化課としても、この要望に添って保存の可能性を探るため、現地にて振興局の担当部局と協議をもった。その結果、歩道の計画路面は石室の天井石よりも高く、側溝も設計変更が可能であることから、石室の保存について了解を得た。

塚地古墳の墳丘の多くはすでに消失していると判断されたが、調査区の西端部には周溝の残存している可能性があると考え、Ｍ－Ｎトレンチを掘り下げた。第９図がその土層断面図である。第１層から第４層までは締まりのない砂質土で、後世の山道かと考えた。第７層と第８層は固く締まった土であったが、不均質であり、堆積土とみられた。第５層は古墳の封土と思われたが、第８層との境界は明瞭ではなく、当初は第８層を新しく考えていた。このため、第７層・第８層を古墳の周溝埋土と判断して掘り下げ、ほぼ除去した段階の地形図が第５図である。掘り下げ中に第８層からは弥生土器の出土をみた。ところが、調査の初めに設定したＩ－Ｊトレンチをさらに掘り下げ、墳丘を断割する（第27図）と、第８層は周溝の埋土ではなく、古墳築造以前に丘陵の谷筋に堆積した土であることが確認された。これによって、塚地古墳は周溝も消滅していると判断した。

古墳の最後の調査として石室掘り方の検出に移った。築堤後の堆積層の灰色粗砂を除去すると、石室の東から北西にかけて地山の岩盤が露出し、掘り方の肩の線は容易に検出することができた。古墳



第６図　塚地古墳調査区南壁土層断面図(1/80)

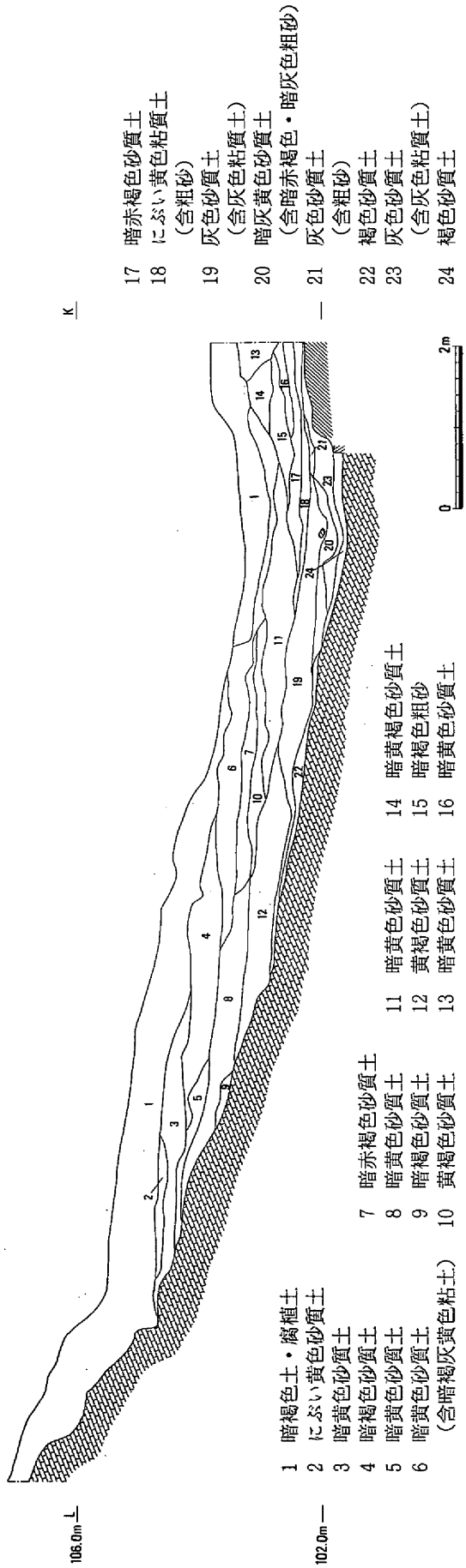
が保存されるため、掘り方内の掘削は一部にとどめた。写真撮影と図面作成が終了するとすぐに掘り方の埋め戻しを行い、続いて石室内から石室上部を盛り土で覆って調査を終了した。

道面遺跡の調査は、塚地古墳の掘り下げが一段落した11月18日から開始した。まず、南斜面側の用地境に沿って、丘陵上方から側溝を掘り下げていったところ、予想した遺跡範囲よりもかなり下方で土器片が集中出土した。このため、側溝を下方の開墾部分の手前まで延ばし、調査区の南端とした。丘陵の北側斜面は急傾斜のため、尾根筋から北へ４～５ｍ離れた地点を調査区の北端とした。また、西端は土取り場の崖面から作業の安全上必要な距離を置いた。この三辺に囲まれた調査区を設定し、表土の除去作業を開始した。なお、調査区の南半は桃畑であったため、表土は畑の開墾土であった。

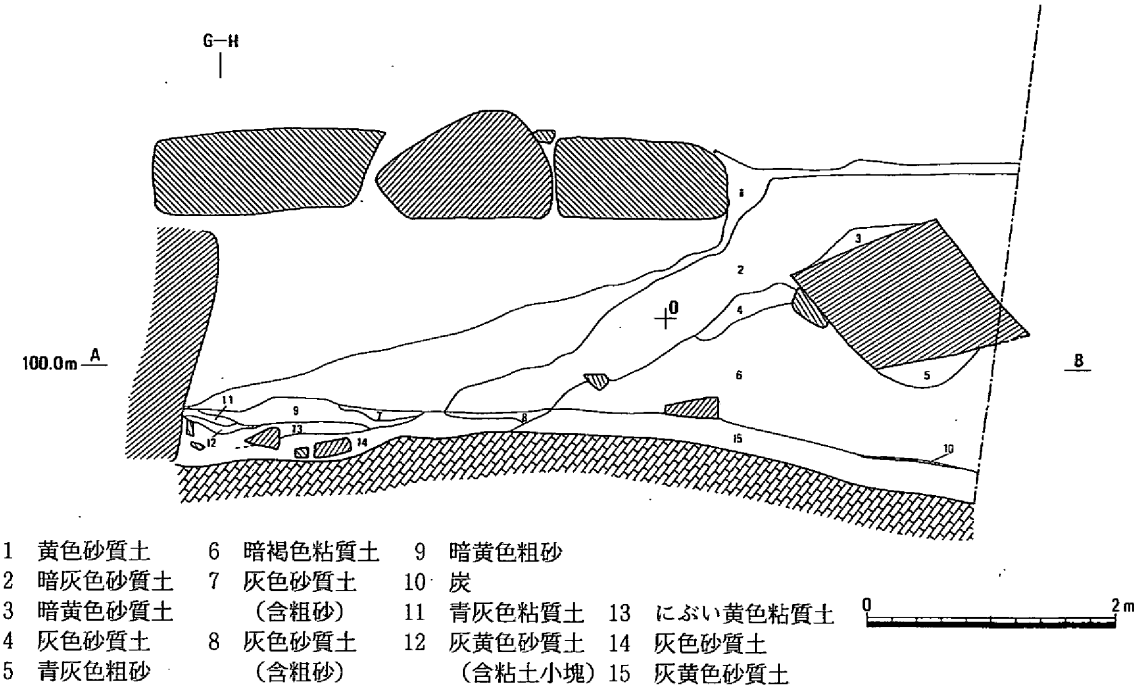
発掘前の伐採で調査区上方の尾根筋上に平坦面の存在を確認したため、尾根筋に沿ってトレンチを設定して掘り下げた。その結果、柱穴が検出され、この地点（第１地点）に竪穴住居の存在する可能性が高くなった。

表土の除去作業は上方から行ったが、第１地点周辺では包含層が表土の下に広がっていた。第１地点の北西側斜面でいくらかの土器片の出土をみた。その地点を第２地点と呼び、表土除去は土器の出土地点をはずして実施した。側溝で土器片が出土した地点を第３地点と呼ぶこととしたが、表土除去の結果、段状の落ち込みが検出され、これも住居跡である可能性が高くなった。第３地点から下方では表土を除去するとすぐに地山の岩盤が露出し、遺構・遺物は検出されなかった。ただ、畑に伴う遺構として調査区の中央を東西に走る畑境の溝と桃の木を植えた方形の穴が残されていた。

表土除去後、各地点の精査に入った。第２地点では柱穴を３個検出したため、調査区を拡張したが、他にはみつからなかった。第１次調査



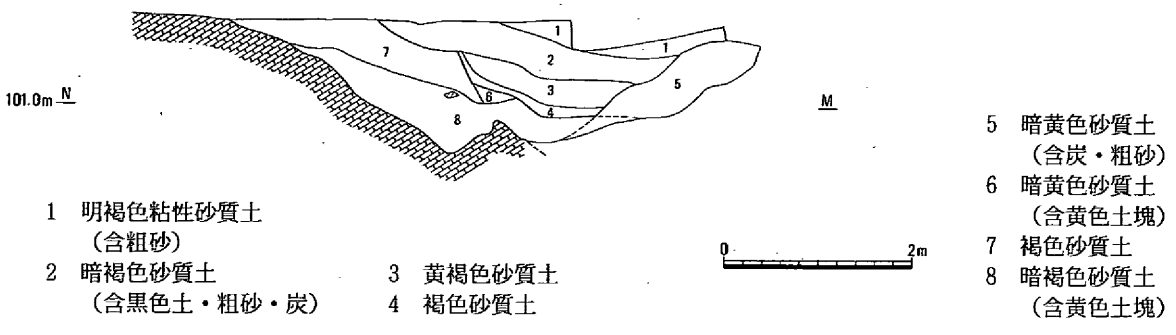
第７図　塚地古墳調査区Ｋ－Ｌトレンチ南壁土層断面図(1/80)



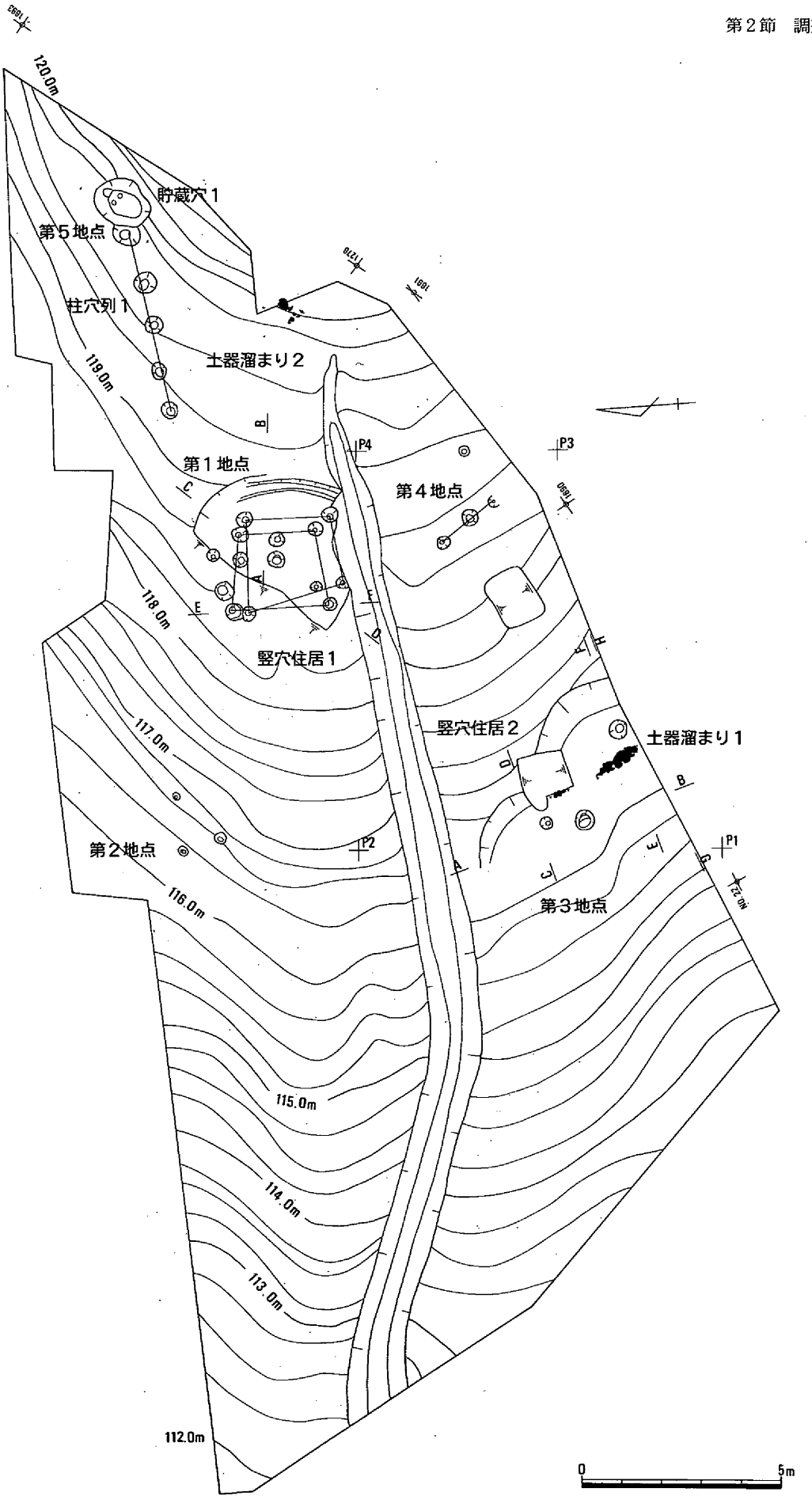
第８図　塚地古墳石室内土層断面図(1/60)

検出の柱穴は第１地点の南に位置していたが、近接して３個の柱穴を検出した。第４地点と呼ぶが、遺構の性格は不明である。第１地点の上方で２カ所の土器溜まりと柱穴列を１条検出した。建物の可能性を考え、調査区を拡張して対となる柱穴列を探したが確認できなかった。一つの土器溜まりの下には貯蔵穴が検出された。柱穴列のあった地点を第５地点と呼ぶ。検出された遺構は調査区上半分の尾根筋から南斜面に分布していた。東の調査区外にも遺跡は続き、尾根筋の上方にも及んでいると推測される。遺構の実測を終了した後、発掘終了後の地形を測量し、道面遺跡の調査を終了した。

発掘調査の終了後、同年度内で報告書を作成するため、調査を担当した二名が１月18日から岡山県古代吉備文化財センターで整理作業に従事した。出土遺物は、土器が整理箱で８箱あり、他に金属器と石器が合わせて20点ばかりみられた。復元作業ののち、実測作業に移ったが、細かく破砕されている土器が多く、同一個体とみられるものの、口縁部と胴部の接合できない例が数点あり、これらについてはやや強引な図上復元を行っている。実測は整理作業員が図化し、調査担当者が手を入れて浄写



第９図　塚地古墳調査区M—Nトレンチ東壁土層断面図(1/80)



第10図　道面遺跡調査区遺構配置図(1/150)

した。耳環の１点については銹化が著しく、肉眼では材質が判断できなかったため、蛍光Ｘ線分析を依頼し、比較資料として材質の明瞭なもう１点も同時に依頼した。遺構の浄写は調査担当者が上記の作業と平行して実施した。その後、報告書の割付けと原稿の執筆・編集を行い、作業を終えた。

調査日誌抄

平成10年（1998年）

11月４日(水)　器材搬入、塚地古墳発掘開始
９日(月)　塚地古墳墳丘周辺掘り下げ開始
13日(金)　塚地古墳石室内掘り下げ開始
18日(水)　道面遺跡表土剥ぎ開始
12月２日(水)　塚地古墳調査区全形写真撮影
８日(火)　塚地古墳石室内遺物出土状態実測開始、転落天井石除去
10日(木)　道面遺跡第１地点・第２地点・第３地点掘り下げ開始
11日(金)　塚地古墳石室内遺物取り上げ、道面遺跡第５地点掘り下げ開始
15日(火)　塚地古墳石室掘り方掘り下げ
16日(水)　塚地古墳墳丘断割トレンチ掘削
21日(月)　塚地古墳石室掘り方実測、道面遺跡第３地点遺物出土状態実測
24日(木)　道面遺跡第３・５地点遺物出土状態実測・遺物取り上げ
25日(金)　塚地古墳石室実測、道面遺跡第５地点貯蔵穴掘り下げ

平成11年（1999年）

１月５日(火)　塚地古墳石室実測、石室内埋め戻し開始
７日(木)　道面遺跡遺構実測
12日(火)　道面遺跡地形測量
14日(木)　撤収作業、発掘調査終了

発掘調査は、岡山県井笠地方振興局からの分任事業として、岡山県教育委員会が調査主体者となり、その実務については、岡山県教育庁文化課の指示のもとに岡山県古代吉備文化財センターが担当した。

調査・整理体制

平成10年度

岡山県教育委員会
教育長　黒瀬定生

岡山県教育庁
教育次長　平岩　武

文化課
課　長　髙田朋香
課長代理　西山　猛
参　事　正岡睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長）　松本和男
主　事　三宅美博

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　葛原克人
次　長　大村俊臣

＜総務課＞
総務課長　小倉　昇
課長補佐(総務係長)　安西正則
主　査　山本恭輔

＜調査第三課＞
課　長　柳瀬昭彦
課長補佐（第三係長）　岡本寛久
主　事　加藤和歳

第3章　道面遺跡

第1節　概　　要

遙照山からは四方に尾根筋が派生するが、南西方向に伸びた尾根筋の北半部分では、北西斜面側で細かい襞のように北西ないしは西へ伸びる幾筋もの小さな枝尾根がみられる。その一つの尾根筋上に道面遺跡は立地し、一つ尾根筋を隔てて段林遺跡の所在した尾根筋が伸びている。道面遺跡のある尾根筋は県道矢掛寄島線によって分断され、西の先端部分は道路面の高さまで削平されて畑となっている。この尾根筋の南には深い谷が走り、県道から西では段々の水田が造られている。この谷のさらに下方には大きな溜池があり、最終的には本庄川によって形成された深く狭長な谷に合流している。溜池の堤防の裾から道面遺跡までの比高は32mを測る。

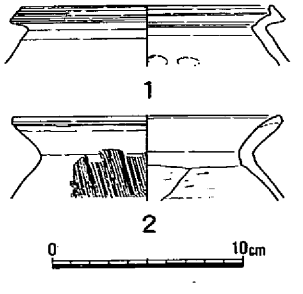
道面遺跡は海抜116mから上方の尾根筋上から南斜面にかけて広がっているものと推定される。この部分では第10図からも明らかなように、斜面の傾斜が尾根筋の下方よりも緩く、住居などの施設を構築するのが容易であったためと思われる。発掘調査を実施した部分は遺跡の下半西端部に位置していたとみられ、検出された遺構は竪穴住居2軒、柱穴列1列、貯蔵穴1基、土器溜まり2カ所で、他にいくらかの柱穴が認められた。数軒の竪穴住居からなる小規模な集落遺跡であったと推定される。遺構に伴う遺物は少なかったが、その年代は第2地点を除いて弥生時代後期後葉のものが多く、これは土器溜まりの年代とも等しい。このことから、検出された遺構の多くはこの年代のものと推定される。ただ、竪穴住居の年代は確定できず、弥生時代後期前葉の土器の出土もいくらか認められた。

第2節　遺構と遺物

1　竪穴住居

竪穴住居1（第12図、図版2）

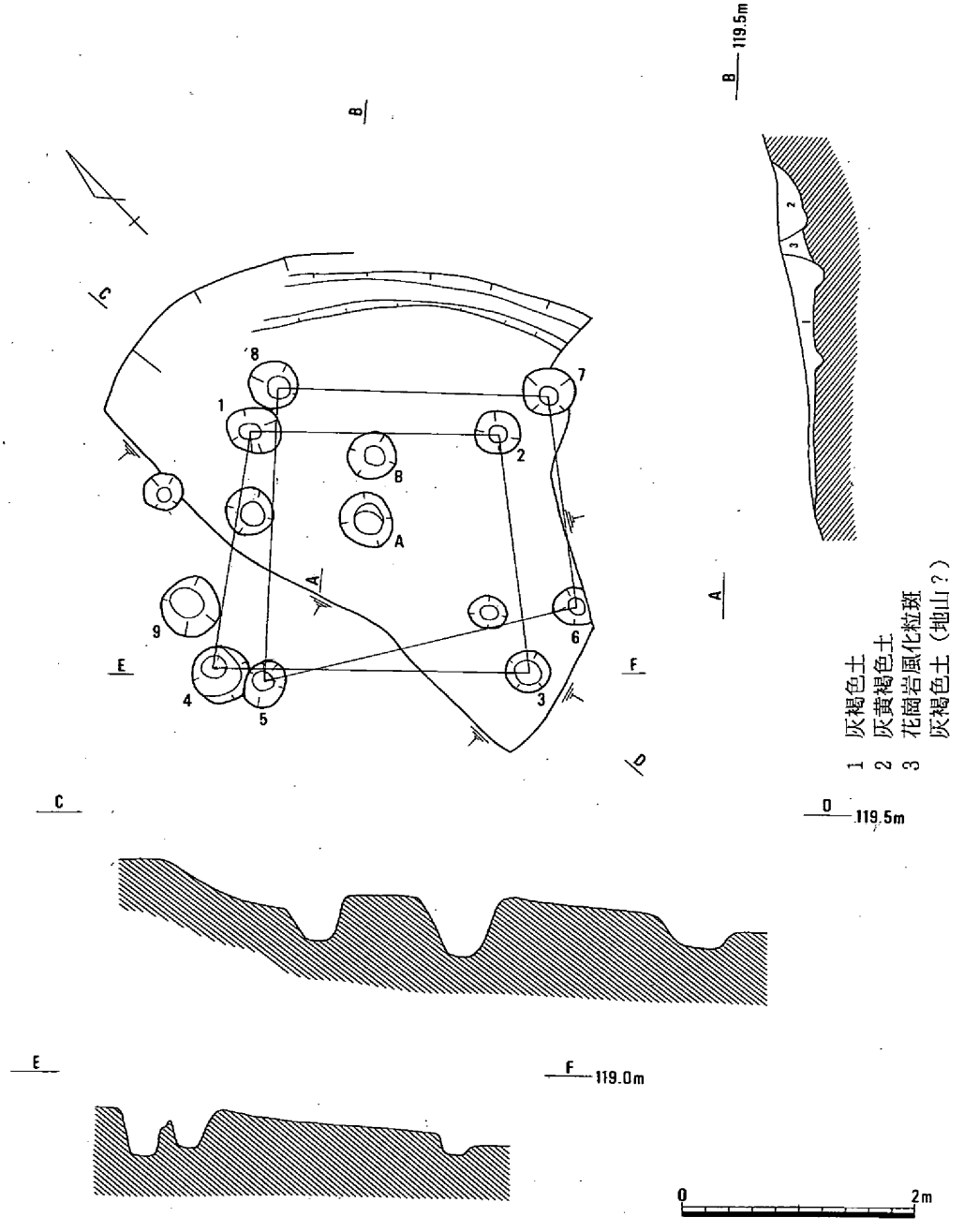
調査区東半の中央で検出された。尾根筋上にあって残存状況は悪く、上方側で壁体溝が1/5ほど残存していたにすぎず、床面も果樹園の側溝と自然崩落で消滅し、約1/4が残されているのみであった。壁体溝の形状から平面形は円形と推定され、直径は5.4m程度とみられる。竪穴の深さは最大でも30cmにすぎない。埋土は炭粒を含んだ灰褐色土で、貼床は認められなかった。壁体溝は幅が30～40cmで、深さは8cmと浅かった。住居内からは14個の柱穴が検出されたが、調査中から図中に直線で結んだ4カ所各2個の柱穴の存在は認識できていて、主柱4本からなる住居が少なくとも一度は建て替えられたものとみられる。ただ、柱穴5～8を結んだ四角形はかなり歪んでいるため、あるいは柱穴6



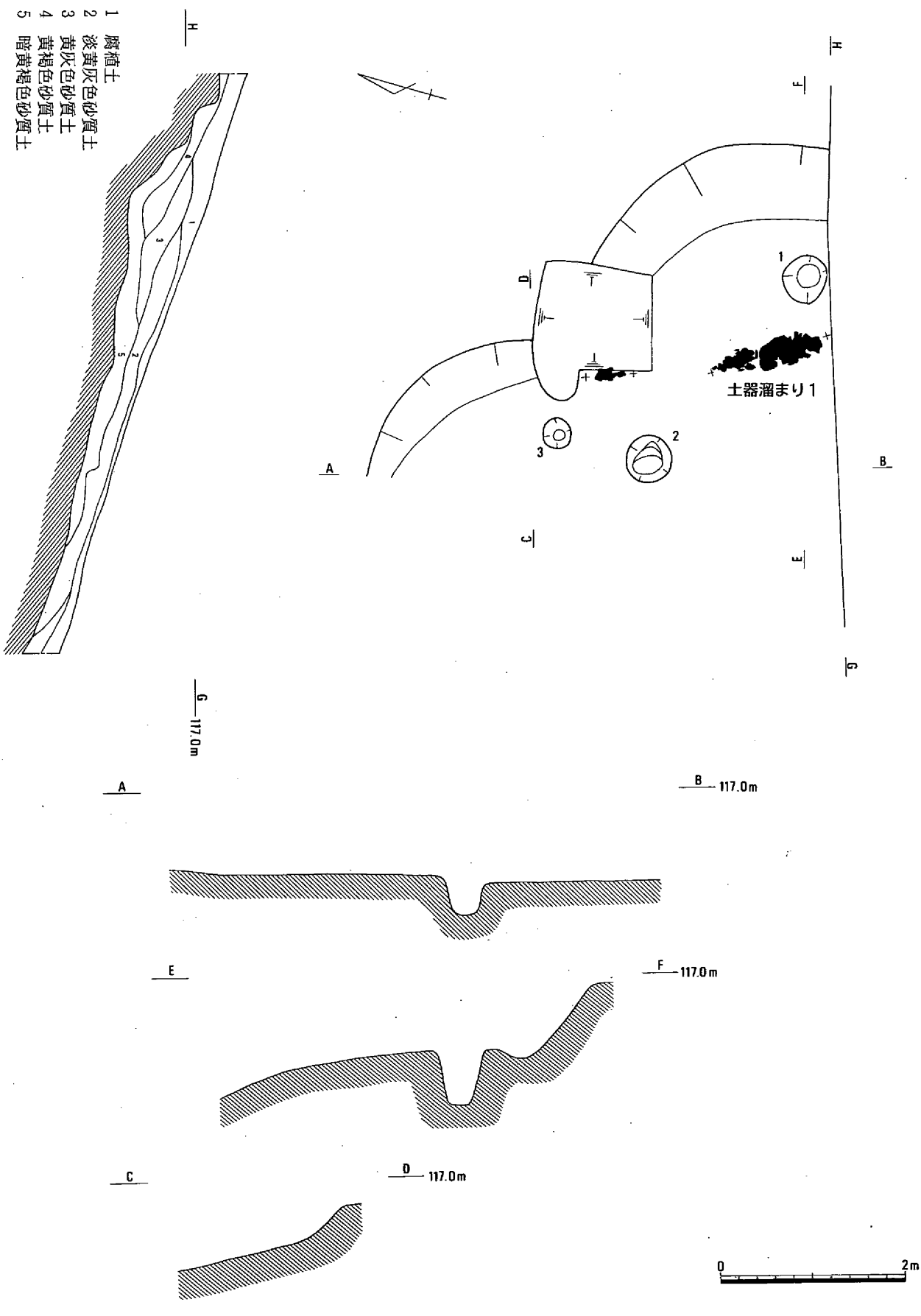
第11図　第1地点出土土器(1/4)

～９と未検出の柱穴の５本の主柱からなる住居の存在した可能性も考えられる。柱穴Ａ・Ｂはその位置から中央穴の可能性も考えたが、穴の規模は他の柱穴と等しく、埋土も異ならなかった。主柱穴の規模は直径が40～50㎝、深さは20～43㎝を測った。柱穴１と柱穴４の柱間は204㎝であった。

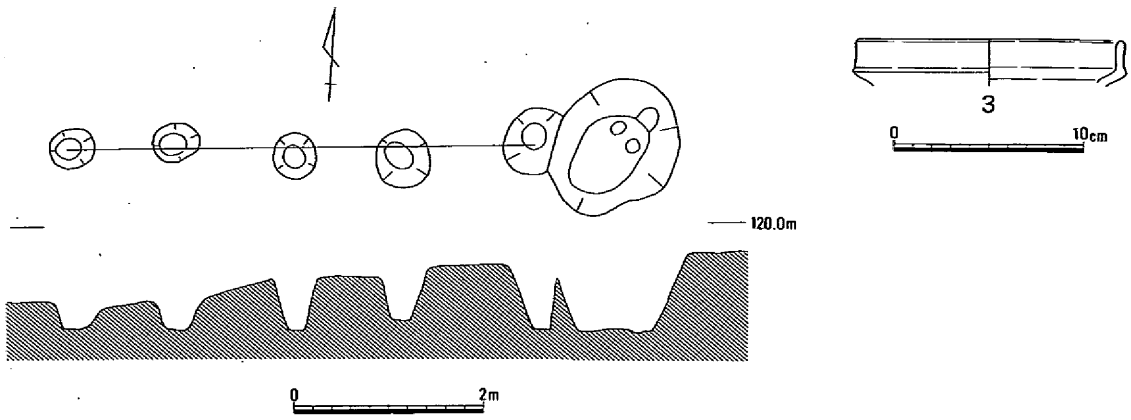
竪穴住居１の埋土や柱穴からは土器の細片が少し出土したのみだが、竪穴住居１のある第１地点出土の土器として第11図に示したものがある。ともに甕の口縁部で、**1**は口縁端部を上方へ折り返し、端面に２条の凹線を施している。胴部の内面はナデている。**2**は「く」の字状に外反させた口縁の先端を丸くおさめる。胴部の内面はヘラケズリされる。**1**の年代は弥生時代中期後葉から後期前葉、**2**は後期後葉と考えられる。この土器と、竪穴住居２の埋土から出土した土器溜まりが第１地点付近から投棄されたものとみれば、竪穴住居１の年代は弥生時代後期後葉である可能性が強くなる。



第12図　竪穴住居１（1/60）



第13図　竪穴住居２(1/60)



第14図　柱穴列１・出土土器(1/80・1/4)、貯蔵穴１(1/80)

竪穴住居２（第13図、図版３）

調査区の中央部南端で半分強を検出した。南側斜面に所在し、斜面上方を削平して下方へ土を出し、住居の床面を水平に形成していたものと想定される。斜面下方の盛土部分は自然崩落によって消滅したようで、上方の地山を削平した部分のみが半円形に残存したものとみられる。住居の肩の線は桃の穴を境として二つの円弧に分けられ、建て替えによって二つの竪穴が重複したものと考えられる。ただ、掘り下げ時には重複の痕跡は確認できず、土器溜まりの状況から南の竪穴住居が建て替え後のものと思われる。南の竪穴住居に伴うとみられる柱穴１・２の存在から住居の平面形は円形と考えられる。壁の残存は1/6程度だが、無理に復元すると直径が７ｍ前後の円形の住居となり、主柱は４～５本と考えられる。壁の高さは最大で110㎝を測り、壁体溝はなかった。柱穴１は長径が50㎝、深さは57㎝、柱穴２は長径52㎝、深さ40㎝で、柱穴１と柱穴２との柱間は270㎝を測った。住居の埋土は第５層の暗黄褐色砂質土で、その上に流土が順次堆積していた。土器片が直線状に密集した土器溜まりが住居の床面から10㎝前後浮いた状態で出土し、第５層に埋まっていた。北の竪穴住居はごく一部の残存にすぎないが、柱穴３がこれに伴う可能性がある。柱穴３は長径32㎝、深さ39㎝を測った。

土器溜まりの形成は、その出土状況から、住居が廃絶してその一部が埋没した段階とみられる。このため、住居の年代は土器溜まりの形成時からあまり隔たっていないものと考えられる。土器溜まりの土器の年代は弥生時代後期後葉であり、竪穴住居２の年代も同期かやや先行するだけとみられる。

２　柱穴列

柱穴列１（第14図、図版４）

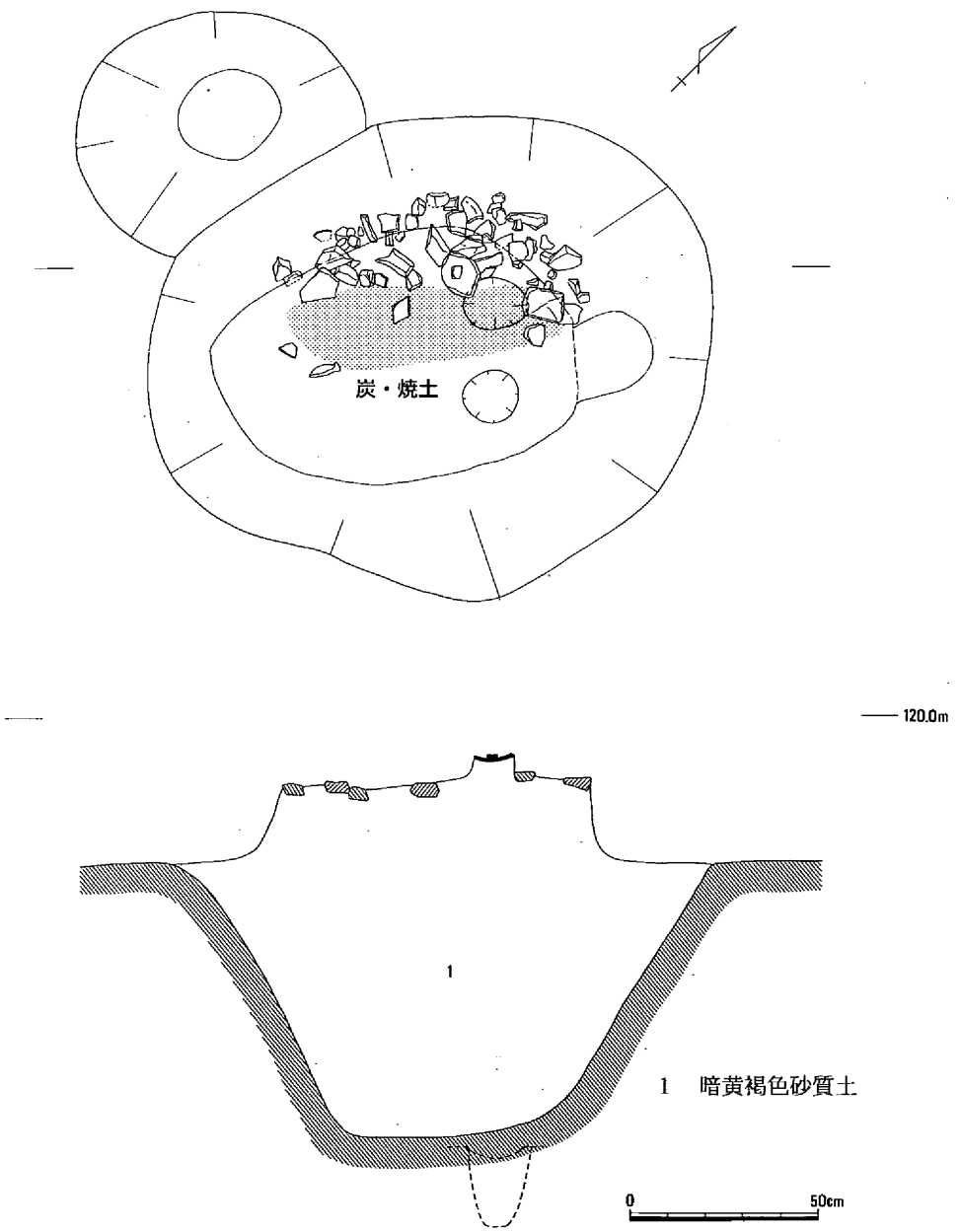
調査区東端、尾根筋のもっとも上方で検出された。ほぼ尾根筋と平行して東西方向に５個の柱穴が列び、尾根筋から７ｍほど北側斜面に寄っていた。柱間は西から110㎝、125㎝、110㎝、145㎝を測った。東端の柱穴は後述する貯蔵穴１と重複し、調査中の知見によれば、東端の柱穴は貯蔵穴よりも古いと認められる。柱穴の規模は長径が50～80㎝で、もっとも深い柱穴は64㎝の深さがあった。傾斜地にあったため柱穴の深さは一定しないが、底面の海抜高度には10㎝程度の差しかみられなかった。

柱穴から出土した遺物はごく少なかったが、１点のみ図示できた。**３**は甕の口縁部で、口縁部は上方へ立ち上がる。弥生時代後期後葉の年代が与えられる。このことや周辺の遺構・遺物の年代観から柱穴列１の年代も同期と考えられる。

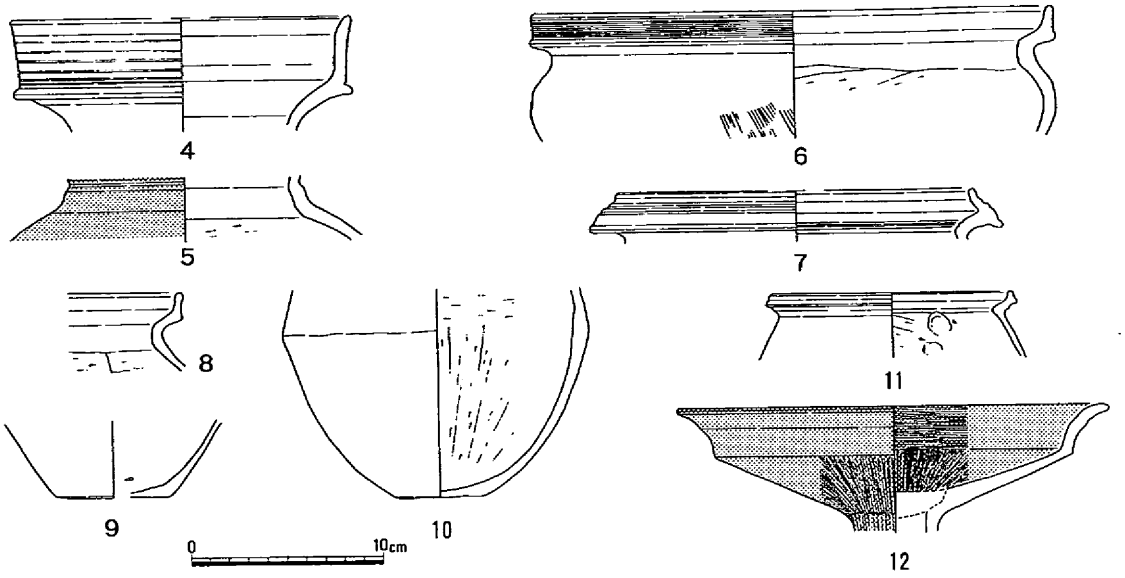
3　貯蔵穴

貯蔵穴１（第15・16図、図版３・５）

柱穴列１の東端で土器溜まりを検出した。土器片が炭や焼土が散乱する長さ80cm、幅20cmの広がりの北西側に細長く集中し、小礫をかなり含んでいた。土器溜まりを残して周辺を地山面まで掘り下げると大形の穴が検出され、土器溜まりの外郭線と穴の肩の線がほぼ平行するようにみられることから、土器溜まりはこの穴の埋土上方に形成されたものと考えられる。穴の平面形は不整形な楕円形で、長径が155cm、短径は130cmを測り、穴の深さは100cmであった。穴の壁はかなりの急傾斜で、断面形は逆台形を呈していた。穴を掘り上げると、底面から直径15cm前後の小さな柱穴が２個、長軸方向の片側に寄って検出された。この小柱穴の深さは３cmと17cmを測り、その距離は心々で25cmであった。



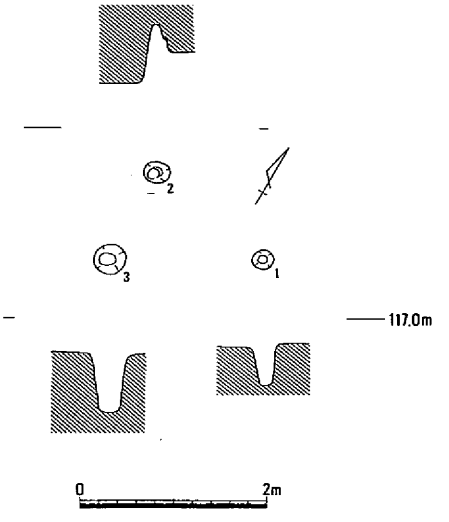
第15図　貯蔵穴１(1/20)

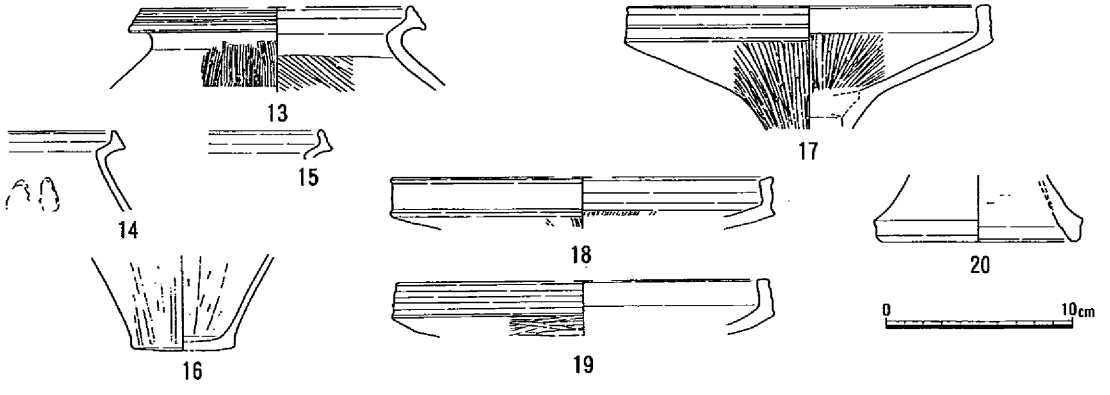


第16図　貯蔵穴１出土土器(1/4)

この穴の性格であるが、穴の規模と、底面から検出された２個の柱穴を昇降ないしは上屋施設に伴うものと推定すると、貯蔵穴とみるのがもっとも妥当であろう。穴の断面形はフラスコ状を呈さないが、後世の崩落の可能性も考慮する必要がある。遺物の出土状態から最後にはゴミ穴にされたとみられる。

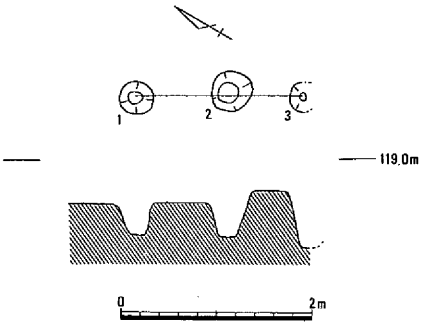
第16図は貯蔵穴１の土器溜まりから出土した土器である。**4**と**5**は長頸壺で、長く立ち上がった口縁部の外面や頸部には沈線を巡らせている。**6**は鉢とみられ、直立した口縁部の外面には櫛状工具による沈線が巡らされる。**7**～**11**は甕とみられる。**7**の口縁部は折り返され、外面には凹線を巡らせる。**8**の口縁部は直立し、ヨコナデ調整がなされる。**11**の口縁部外面の断面は弓形を呈し、端部をわずかに上方へ肥厚させる。**12**は高杯で、杯部から柱状部にかけては一連で作られ、杯底部を円盤で充填している。器面の調整はヘラミガキを施す。





第17図　第２地点柱穴群・出土土器(1/80・1/4)

出土した土器の年代をみると、**7**の弥生時代後期前葉から**12**の後期中葉の前半、さらに**4**の後期後葉まで幅があり、同時に使用されていた土器が一括投棄されたものではなく、遺跡内一帯の土器を集めている可能性がある。貯蔵穴１の年代は、柱穴列１との重複関係からも後期後葉と考えられる。



第18図　第４地点柱穴群(1/80)

4　柱穴群

第２地点柱穴群（第17図、図版６）

調査区中央部の北端で柱穴を３個検出した。尾根筋の傾斜が緩く変化する付近で、土器片がかなり出土したため、建物の存在を想定して調査区を拡張したが何も検出されなかった。

13～**16**は甕である。口縁部はいずれも端面を拡張して凹線を巡らせるが、**13**は上下に、**14**・**15**は上方へ拡張している。胴部の上端内面はハケあるいはナデで調整される。**16**の胴部内面はヘラケズリの後にナデ調整される。**17**～**20**は高杯である。杯部の口縁は屈折して立ち上がり、上端に面を形成する。立ち上がり部分の外面に凹線を巡らせるものと無文のものがある。口縁部以外の杯部はヘラミガキされる。これらの土器の年代は弥生時代中期後葉と考えられるが、口縁部の形態には微妙な変化が認められ、これを時間幅と捉えるかどうかは資料の一括性からも問題となる。

第４地点柱穴群（第18図）

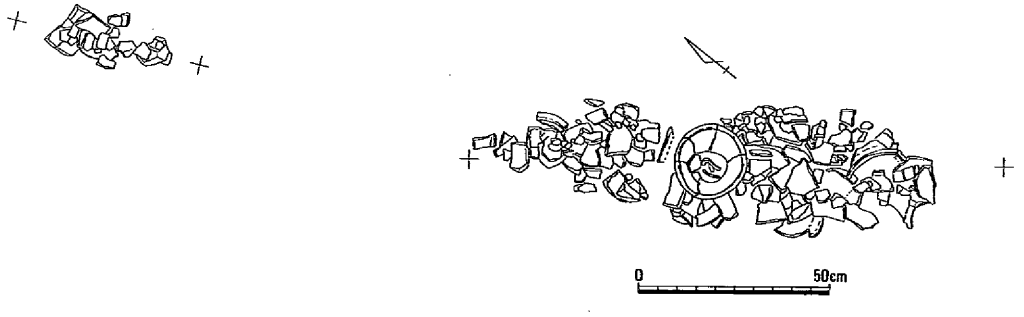
調査区東半の南端、竪穴住居１の南３ｍの地点から検出された。３個の柱穴が直線上に列ぶが、柱穴の規模や底面の高さの変化が大きく、一つの構造物を構成するものとは考えられない。柱穴１からは弥生土器の細片が出土したが、他の柱穴からは遺物の出土はみられなかった。

5　土器溜まり

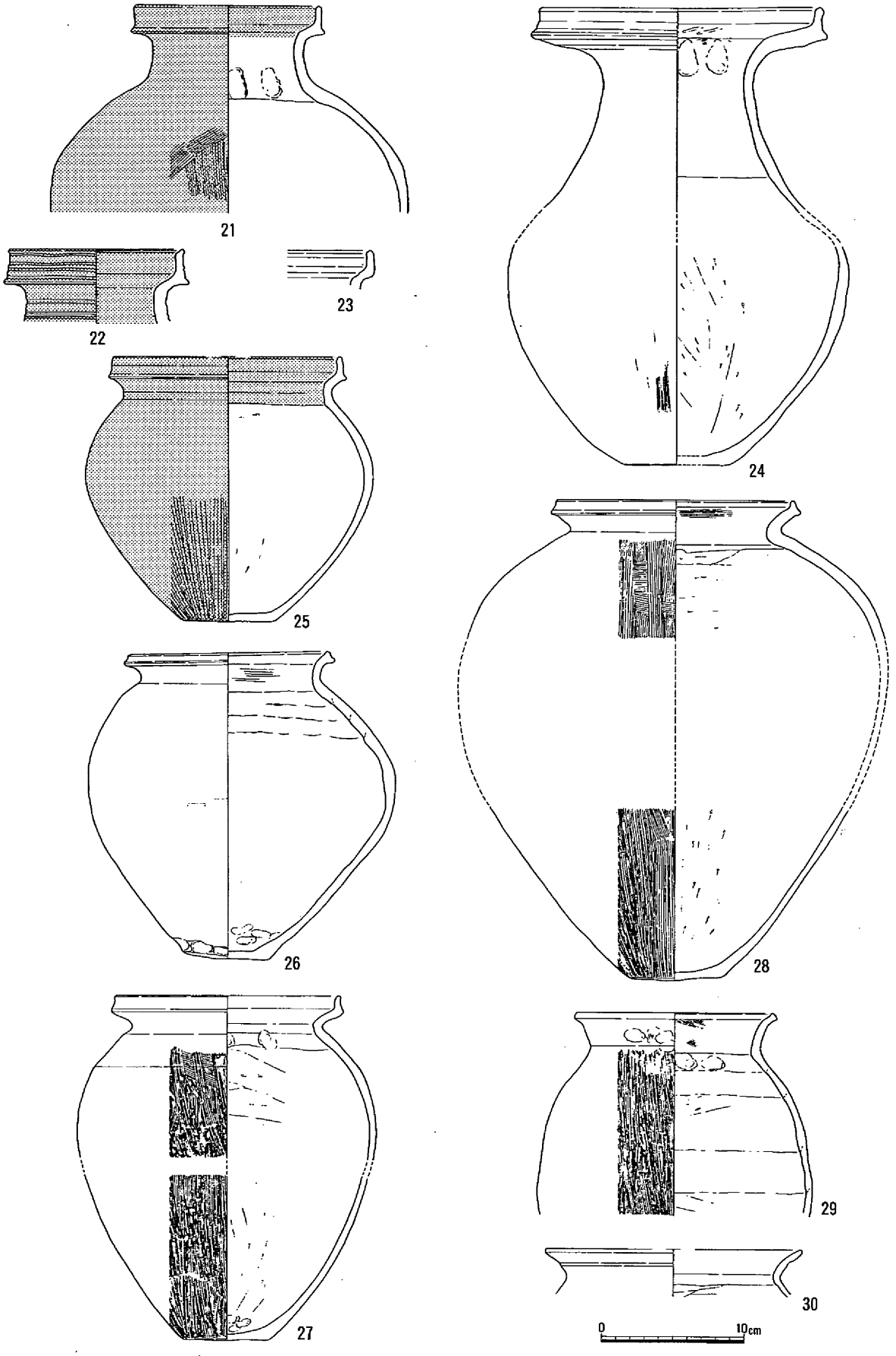
土器溜まり１（第19～21図、図版４～６）

竪穴住居２の床面近くから検出された。土器は南北２カ所に分かれ、帯状に広がっていた。北側の土器溜まりは後世の破壊をうけている可能性が高い。土器溜まりは住居の床面からは浮いていて、その伸びている方向は等高線と平行していた。このことから、竪穴住居２が廃絶し、住居がいくらか埋没して自然な傾斜面が形成された段階で、第１ないしは第４地点にあたる上方から土器が一括して投棄されたものと考えられる。南北に分けられるため、投棄が二度あったことも考えられる。

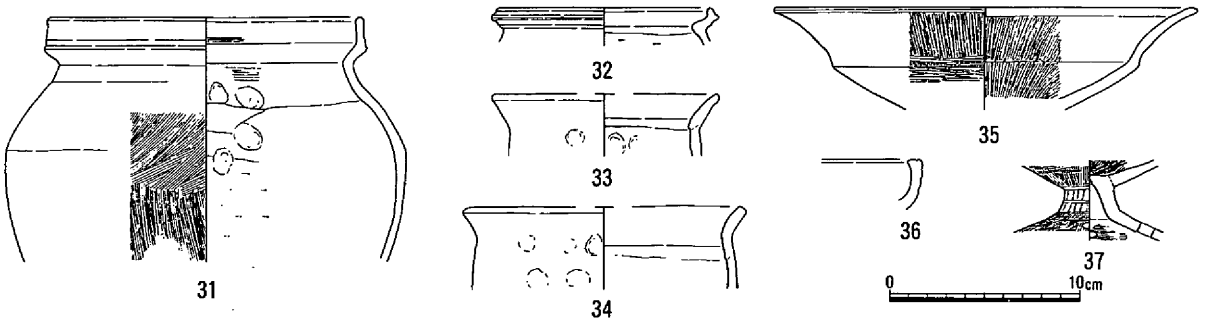
図示した土器の内、**31**は北の土器群出土である。**21**～**25**は壺とみられる。口縁部を上方へ高く拡張



第19図　土器溜まり１平面図(1/20)



第20図　土器溜まり１出土土器（１）(1/4)



第21図　土器溜まり１出土土器（２）(1/4)

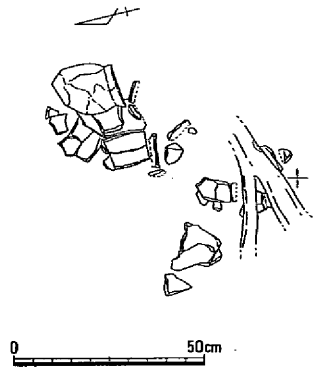
し、**22**では口縁部から頸部にかけて外面にヘラ描きの沈線を巡らせる。**24**の長頸壺は器面の剥落が著しく、頸部の文様は不明である。**25**はむしろ鉢とすべきか。器表は剥落が著しいが、胴部下半にはヘラミガキの痕跡が認められる。**26**～**34**は甕だが、形態は一様ではない。とくに口縁部は様々である。**26**・**28**は口縁の端部を上下に拡張させ、胴部は球形に近く張っている。**27**・**31**は口縁部を上方へ立ち上げ、胴部は肩が張っている。**29**・**30**の口縁部は上端をわずかに折り曲げている。胴部はなで肩である。**32**～**34**は小形の甕とみられる。**32**の口縁部は短く、端部は肥厚させる。**33**・**34**は「く」の字状に外反する単純な口縁部である。**35**～**37**は高杯である。**35**は大きく外反する口縁部をもつ杯部で、内外面はヘラミガキで調整する。**36**は高杯の杯部とみられ、屈曲して立ち上がる口縁部の外面に凹線を３条巡らせ、水平な端面をもっている。**37**は**35**のような杯部に付く脚の一部で、柱状部分は短い。

土器溜まり１の土器は弥生時代後期後葉と考えるが、**36**のみは中期後葉である。また、**27**と**31**では形態に違いが認められ、時期差を示すとみられる。**31**が北の土器群のものであることからすると、投棄が一時ではなかったことも推定されるが、出土状態からは大きな時間差は考えにくい。

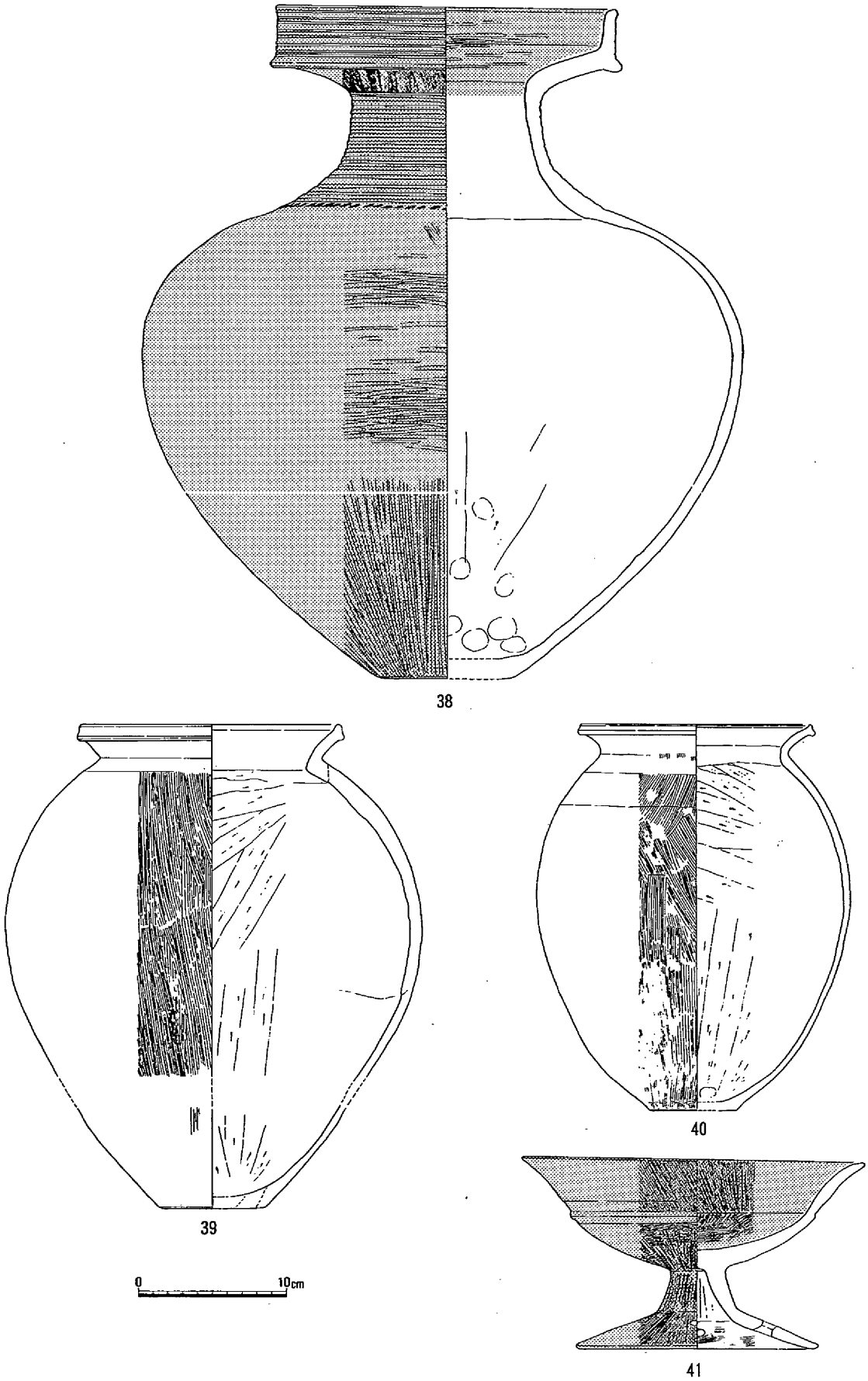
土器溜まり２（第22・23図、図版４・６）

調査区のもっとも高い場所で検出された。上方に向かっては尾根筋の傾斜が急になるようで、急斜面の裾に形成されたものと考えることもできる。大木がここにあり、根が土器溜まりに食い込んでいた。包含層を掘り下げ始めた段階から土器片の出土をみていたが、土器溜まりとして認識したのはかなり後のことで、その段階での平面図が第22図である。この段階ではかなりの土器片が取り上げられていた。地山の確認も困難で、一部に土壙の肩かと思われる傾斜の変換部分を認めたが、全体像を把握するには至らなかった。土器の出土状態をみると、一部を欠損した甕**40**が横倒しになり、周辺には大形の破片がみられた。先に取り上げられた高杯**41**もほぼ完形に近かった。このことから、図示した４個体の土器がほぼ完形に近い形で置かれていた可能性も考えられる。

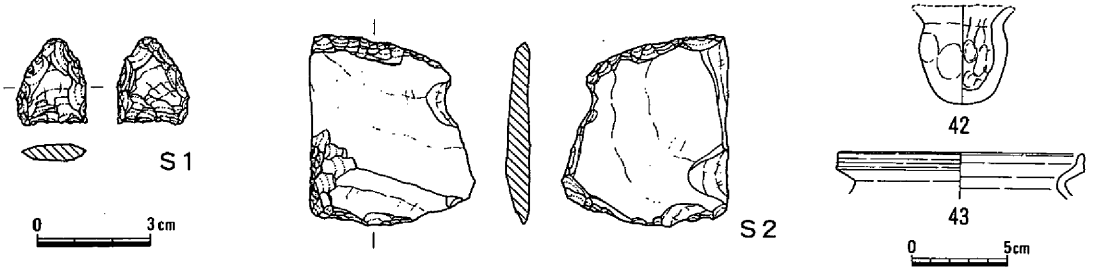
38は大形の壺で、全形は推定復元である。口縁部は屈折して高く立ち上がり、立ち上がり部分と頸部の外面にはヘラ描き沈線が巡らされる。頸部下端には工具による連続刺突文が施される。立ち上がり部分から下の口縁部外面にはハケ調整の痕跡が残る。胴部の外面と口縁部の内面はヘラミガキされる。胴部内面はヘラケズリとみられるが、剥離が著しくて明瞭ではない。**39**・**40**は甕である。口縁端部を



第22図　土器溜まり２平面図(1/20)



第23図　土器溜まり２出土土器(1/4)



第24図　道面遺跡出土弥生時代石器・土器(1/2・1/4)

上下に拡張させる。内面のヘラケズリの範囲は頸部下端に及ぶ。胴部最大径は器高の中央付近に位置する。**41**は高杯である。杯部は大きく開き、口縁部と体部との境は軽い段になっている。柱状部は短くて下方に広がり、外面には縦方向に面取りを行ったような稜線が認められる。脚部は大きく広がり、脚端には端面をもつ。脚部の透かし孔は４方向にある。器面の調整は、杯部内面から柱状部の外面にかけてはヘラミガキで、脚部の内外面はハケ調整である。**38・41**の胎土には金雲母が多く含まれ、色調は黄橙～橙色を呈する。**40**の胎土にも金雲母が多く含まれるが、色調はにぶい橙色である。

土器溜まり２から出土した土器は、壺の口縁部が屈折して高く立ち上がることや、高杯の柱状部が短いことなどから、弥生時代後期後葉の年代のものと考えられる。

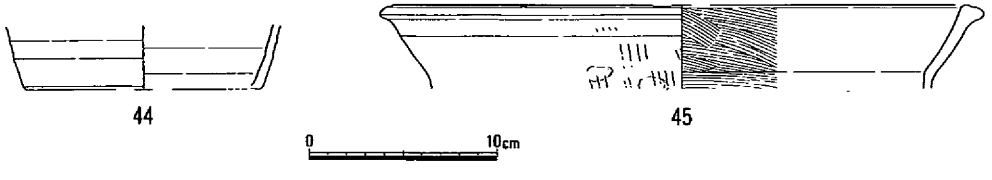
6　遺構に伴わない遺物

弥生時代の遺物（第24図、図版６）

Ｓ１はサヌカイト製の石鏃で、第３地点から出土した。不整形で左右対称にはなっていない。刃部の調整剥離は不規則である。**Ｓ２**もサヌカイト製で、表土層から出土した。図の下辺には細かい剥離がなされ、上辺にも刃潰しがみられる。また、片側の側辺には小さな抉りが作られ、石包丁かと思われたが、もう片側の側辺の下半にも調整の剥離が認められる。折損した石包丁を転用したものか。**42**は表土層から出土した手捏ね土器である。胴部の内外面には指頭圧痕が顕著である。**43**は甕の口縁部で包含層から出土した。口縁端部を上方へ拡張している。**42・43**の年代は後期後半と考えられる。

中世末期以降の遺物（第25図）

44は須恵質の底部付近の破片で、鉢ないし壺かと思われる。底部は平坦で、きわめて薄くなるようである。外面はヘラケズリされている。その丁寧な作りから中世の末期からあるいは近世以降に降るものではないかとみられる。第１地点から出土した。**45**は土師器の鍋の口縁部である。後述する塚地古墳出土のものときわめて酷似している。口縁端部を拡張し、端面を形成している。煤が外面全面に付着していた。16世紀前半頃のものと考えられる。第３地点から出土した。



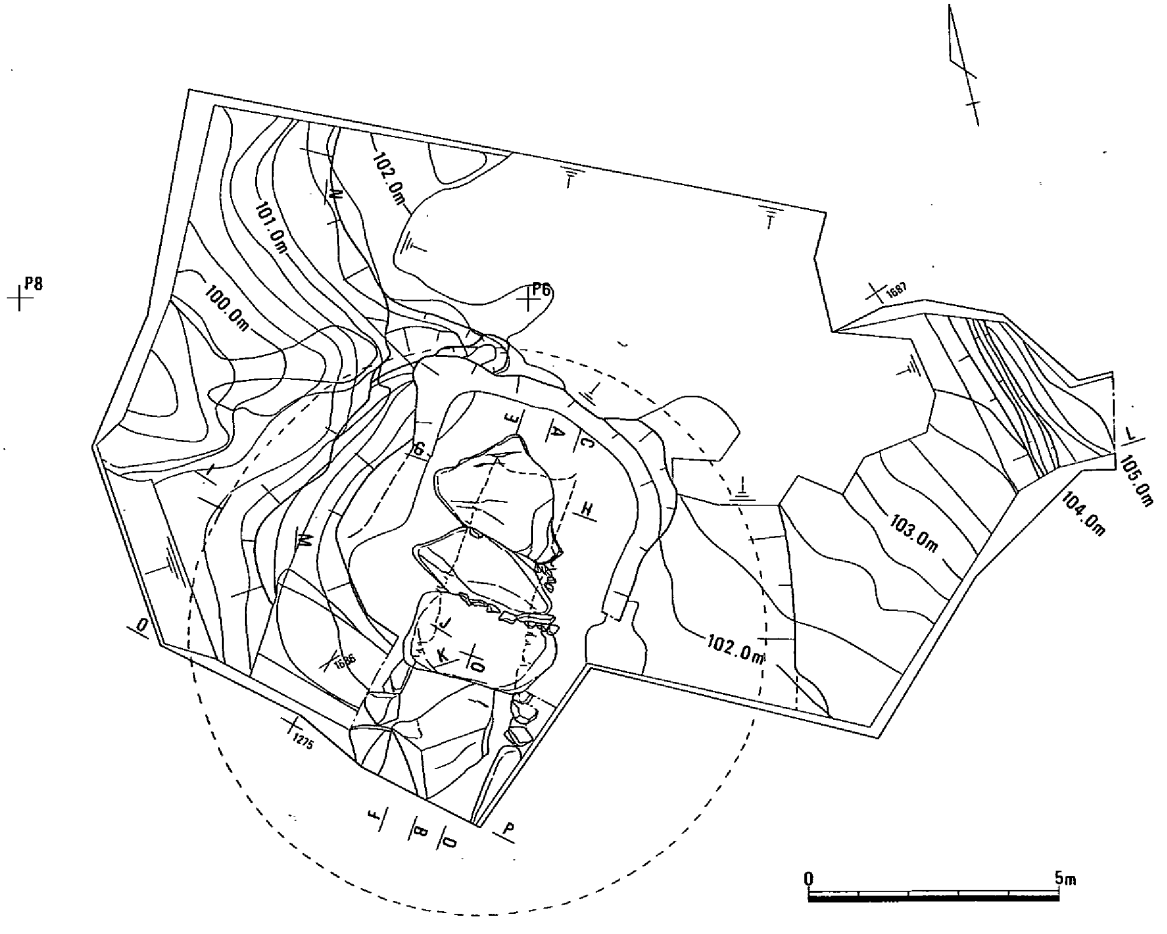
第25図　道面遺跡出土中世土器(1/4)

第４章　塚地古墳

第１節　遺　　構

１　立地（第３図、図版１）

塚地古墳は、道面遺跡の所在した、東西方向に伸びる丘陵尾根筋の南側斜面に位置していた。尾根筋の南側には幅60ｍ程の谷が入り込み、近世以降の築造かとみられる溜池が造られている。この谷は周辺の県道矢掛寄島線沿いの丘陵裾部一帯ではもっとも広く、段林古墳が所在した尾根筋の南側の谷がこれに次ぐ。段林古墳の南にも溜池があり、塚地古墳と段林古墳はともに尾根筋の南側斜面にあって、やや開けた谷筋の奥部に立地するということで共通している。溜池の築造によって地形が改変されているために旧状を推定することは困難であるが、谷底の平坦部から尾根筋の斜面に移る付近に古墳は築造されたものとみられる。天井石周辺で残存していた封土の頂部は海抜102ｍを測り、南側の谷の下流にあたる水田からの比高は17ｍ程度になる。



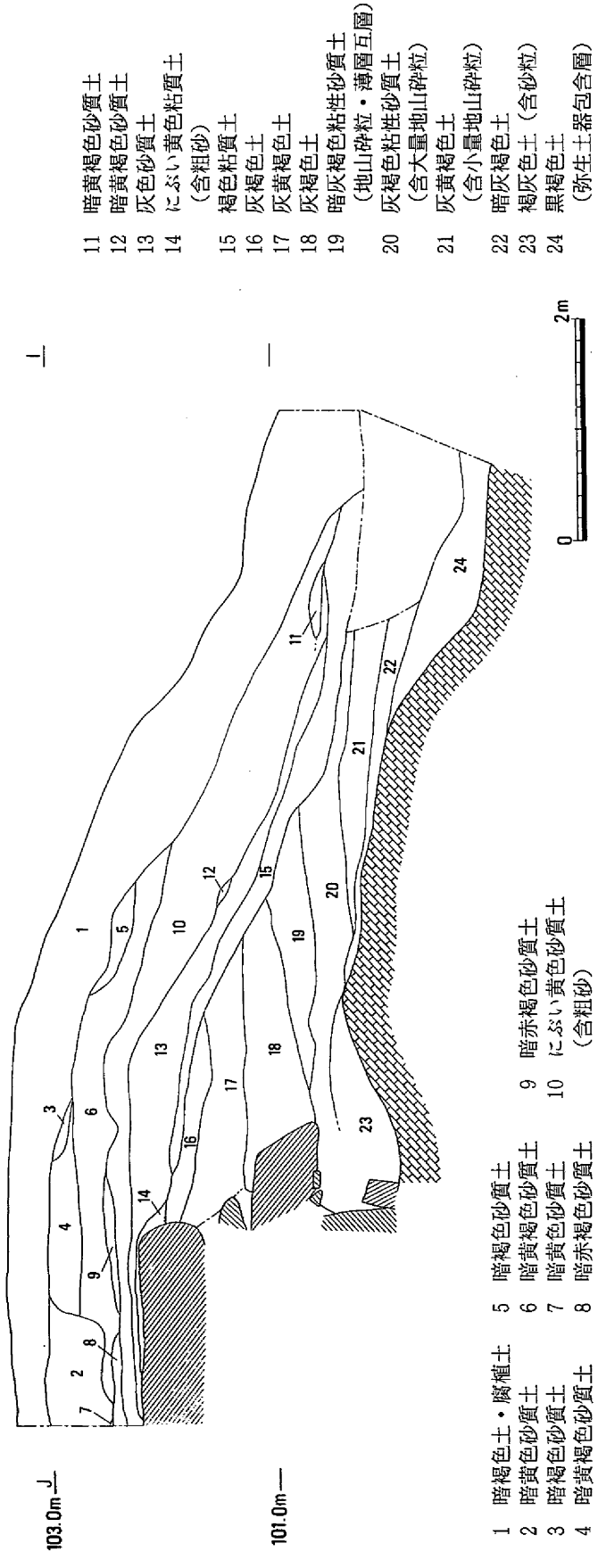
第26図　塚地古墳調査後地形測量図（1/150）

2　墳丘

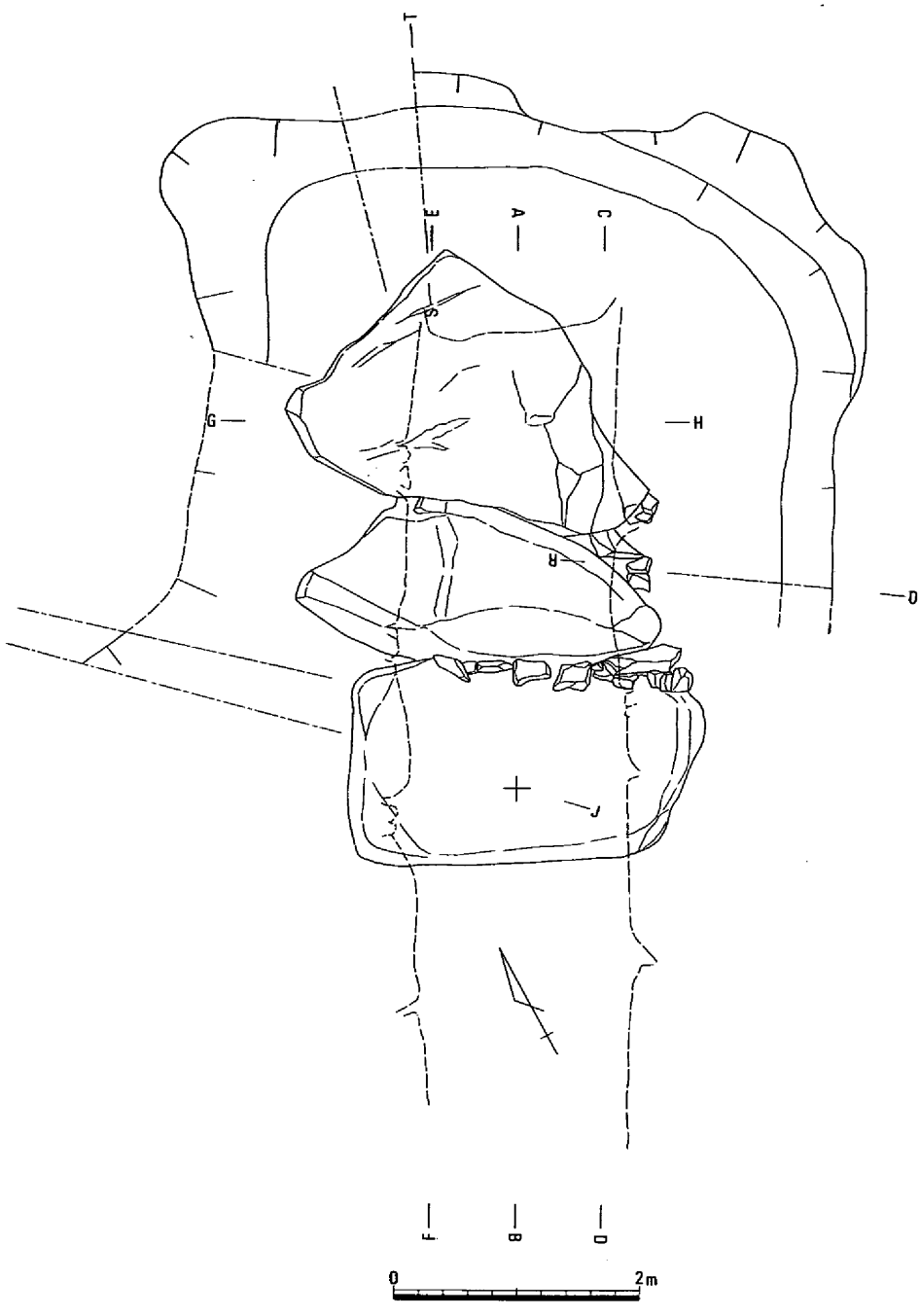
（第26・27図、図版７）

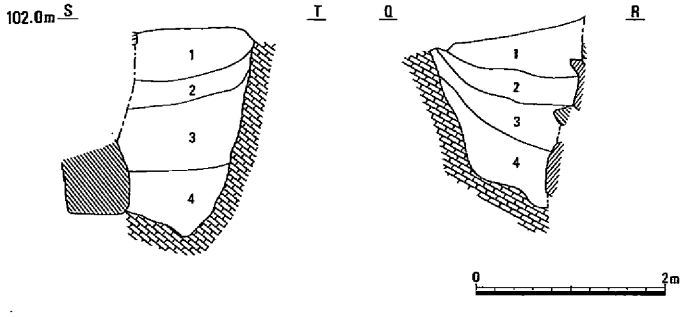
塚地古墳の墳丘は、第２章第２節で述べたように、天井石から上方については後世の削平を受けてすでに消滅していて、古墳の周溝も確認されなかった。石室から東半部では後世の堆積土を除去すると地山が検出されたが、石室から西半では石室の主軸が尾根筋斜面の等高線とは直交しないため、石室掘り方の肩部が南に向かって下降し、Ｉ－Ｊライン付近では墳丘の盛り土を２ｍの高さで確認することができた（第27図）。

第27図第24層が古墳築造以前の堆積層で、第22層・第23層の下面が石室を構築するための削平面になる。第23層は石室掘り方の埋土と考えられる。墳丘の堆積土を観察すると、第18層が側壁の二段目の石に対応しているのがまず目につき、第17層は側壁の上端部に、第19・20・23層は側壁の一段目の基底石に対応していると捉えることができる。したがって、塚地古墳の築造にあたっては、まず石室の掘り方を掘削し、次に石室を構築しつつ、各段が積み上がるごとに墳丘を盛り、石室の上段まで積み上がった段階で天井石を横架し、最後に天井石の上方から墳丘全体にかけて盛土を行って、墳丘を整備したものと考えられる。石室構築時の盛土には石室掘り方の掘削によって出た土を使用したようで、第19・20層には地山の砕粒が大量



第27図　塚地古墳墳丘断面（Ｉ－Ｊ）土層図(1/60)





1　黄褐色土
（含地山砕粒・粗砂）
2　黄灰色土
（堅緻）
3　褐色土
（含粗砂）
4　暗灰黄色土
（含粗砂）

第28図　塚地古墳石室掘り方平面図・土層断面図(1/60・1/80)

に含まれていた。

墳丘の形状をしのばせる痕跡が二点指摘できる。一つは、溜池堤防の取り付き部分が西側で球状の膨らみをみせていることであり、いま一点は、石室東方の削平された地山面で弧状の低い段が認められたことである。前者は、後世の整形も考えられるために不確実だが、後者は、後世の畑の段や地山傾斜面の等高線とは平行しないため、後世の削平とは直接には繋がらないようである。塚地古墳は円墳の可能性があるとしておきたい。軽い段を周溝の底と考えれば直径11m前後と計測される。

3　石室掘り方（第28図、図版8・9）

塚地古墳の埋葬施設は横穴式石室で、石室の構築にあたっては尾根筋の斜面裾部を方形に掘削した掘り方を造っていた。ただ、溜池堤防下に石室の一部が埋没していたことから掘り方の検出は北側の一部にとどまり、さらに底まで掘り下げたのはもっとも奥の北西隅から北東部分にかけてで、墳丘断割トレンチでは肩部を確認したにすぎない。石室の主軸が尾根筋の斜面と直交していなかったため、掘り方は左右対称とはならなかった。西側の肩部はじょじょに低くなり、墳丘断割トレンチから少し南で西へ開きぎみに消えるが、東側の肩は高いまま石室主軸と平行するように延びていた。北側の肩は外湾していた。掘り方の規模は、幅が5.8m、深さは2.4mを測り、検出長は4.2mであった。

掘り方内の埋土は4層に分けることができた。東側壁裏のQ－R断面では、埋土の各層と側壁の石積みとの間で対応関係が認められた。すなわち、第4層は一段目の基底石の上端近くまで達し、第3層は二段目の上端までを埋めていた。第1層は側壁の上端、天井石の下面に接し、掘り方内を完全に埋めていた。第1層には風化した花崗岩の小塊が多く含まれていたが、他の層の土は黄褐色系の粘質土が主体で、よく締まっていた。埋土中からは弥生土器の小片がわずかながら出土した。

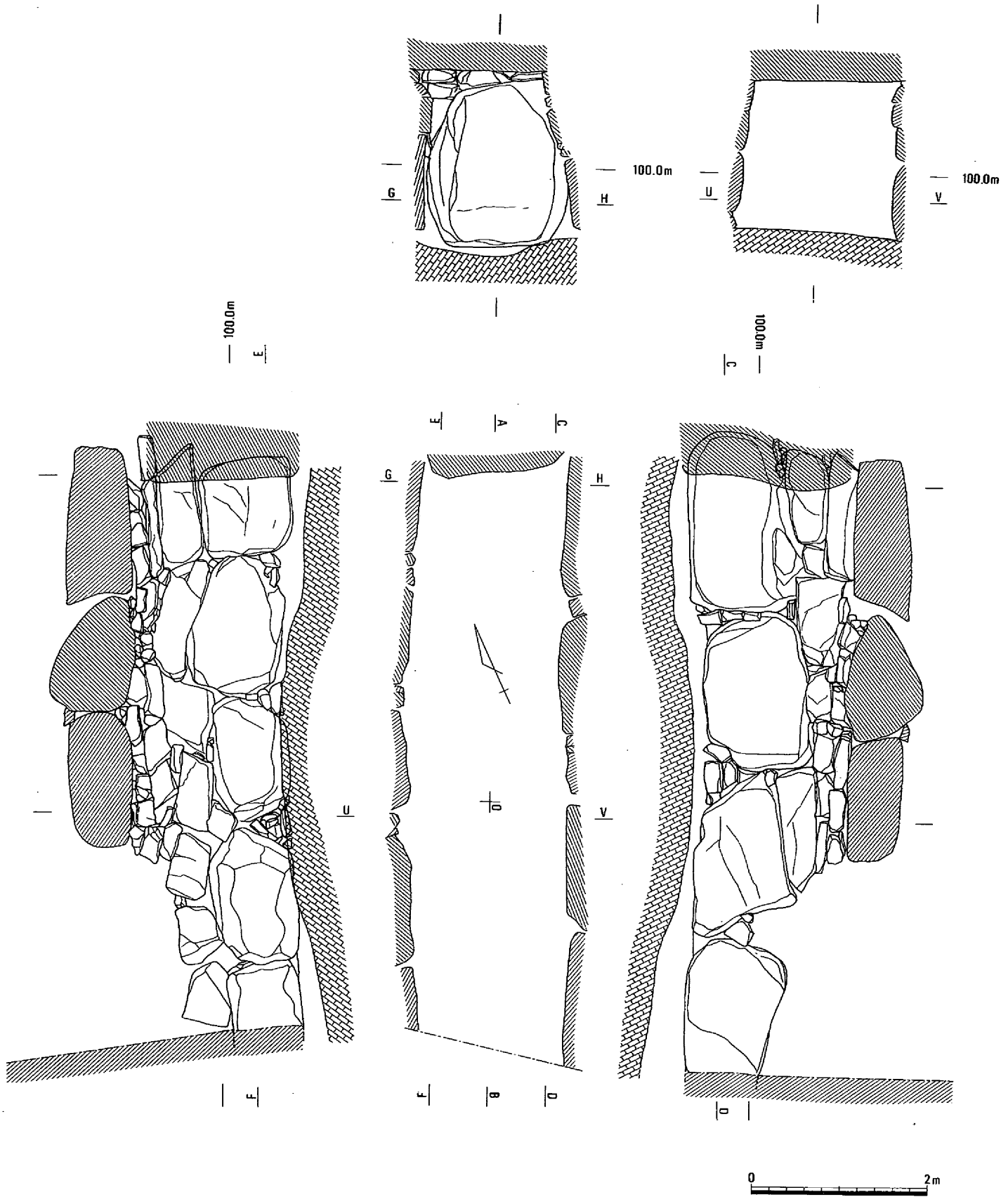
4　横穴式石室（第29図、図版7～10）

横穴式石室の南半は溜池の堤防下に埋没していたため、石室の全貌は明らかにできなかったが、床面の規格や側壁の使用石材や積み方などについてはおおよその姿を把握することができた。石室の残存状況は、天井石が横架された状態にあった玄室部分についてはきわめて良好であったが、堤防下にあたっていた石室前半部では天井石はすでに失われ、側壁も二段目以上が破壊をうけていた。

天井石は奥から3枚が残っていたが、もっとも奥の石は土取り工事によって少し北西方向へずらされたと思われ、石室の北東隅にかなりの空隙が認められた。天井石の形は不揃いで、自然の露岩を加工せずに使用したものとみられる。もっとも奥の石は三角形で、石室奥の「コ」の字部分をかろうじて蓋していたにすぎなかった。奥から三番目の石は長さ288cm、幅168cm、厚さ66cmを測った。

奥壁は高さ192cm、幅158cm、厚さ70cmの一枚石からなり、天井石との空隙に小さな石を詰めて塞いでいた。一枚石には加工はみられず、やや丸みをもっていたために下端では側壁との間に隙間がみられた。石室内の面は平坦に近くなっていた。

側壁は段毎に順次積み上げていったものとみられ、一段目、二段目と、各段の上端がほぼ揃っていた。これは墳丘や掘り方埋土の観察でも確認されたことである。東壁は一段目の石がやや不揃いであったために一部で乱れがみられた。東西ともに一段目の基底石が大きく、二段目から上の石との格差が歴然としていた。また基底石の中でも、東壁の石材が西壁のそれよりもさらに大きくなっていた。基底石は最大のもので長さ200cm、高さ120cmを測るが、厚さは奥壁の一枚石と同様に案外と薄く、石材



第29図　塚地古墳横穴式石室(1/60)

のもっとも広い面を石室内へ向けていた。二段目から上の石は小口面を石室内に向けて置かれていて、側壁の裏面では上段の石が基底石よりも突出していた。残存部分の状況だけから判断すれば、石室の奥部の石材がより大きいようであった。側壁の断面は上方がわずかに持ち送りとなって内側へ傾斜しているようであった。奥壁近くの東壁は天井石の移動の影響を受けている可能性が高い。

石室の平面形をみると無袖式とみられ、東壁はほぼ直線的であったが、西壁はわずかに内湾し、胴張りを呈していた。側壁では玄室部と羨道部を分かつような境界線は認められなかった。実測用の石室主軸はＭＮ－26°－Ｅを測った。石室の規模は、検出長が665㎝、奥壁幅は165㎝、最大幅が180㎝、高さは180㎝であった。石室の石材は花崗岩で、周辺の露岩を使用したものであろう。

第2節　遺　　物

1　遺物の出土状態（第30図、図版11）

横穴式石室内から出土した遺物のほとんどは、溜池築堤以前の堆積土中から散乱した状態で出土した。とくに中世の土器片は第８図第７～10・15層の上面に集中していた。

まず、同一個体の破片の出土状況を検討してみると、中世の鍋(**85**)と甕(**86**)の破片が石室内の全域から細かく破砕された状態で出土したことが注意される。破片の多くは第15層の上面から出土したが、この面では炭層の広がりも認められた。**85**は多量の煤の付着がみられ、**86**も強い火を受けたとみられる剥離があり、炭層と関係する可能性がある。第15層の上面はほぼ平らで、人為的な結果によるとみられる。溜池堤防の土層断面観察結果を考え合わせると、この整地作業は溜池の築堤に伴う可能性が高く、その際に石室内も全面的に攪乱されたものと推測される。須恵器の提瓶(**67**)の破片が**85**・**86**とほぼ同じような出土状況であったことも、攪乱による破壊を示しているのではなかろうか。

遺物の器種別の出土状況でも攪乱は明らかである。耳環をみると４点が１ｍ以上離れて石室内の各所から出土し、鉄鏃も３点にすぎないが、奥部と前方部に分かれていた。土器も土師器と須恵器でそれぞれの集中は認められず、器種別にもまとまりはみられなかった。**69**の土師器高杯と**M18**の刀は副葬時の位置を保っているのではないかと思われたが、**M18**は茎が折れて鍔を欠き、かなり疑問が強い。

以上のように、石室内はほぼ完全に攪乱され、出土遺物の量は石室の規模に比べてきわめて貧弱であった。図示しえた古墳時代の副葬品は土器27点、金属器18点にすぎない。ただ、器種からみれば、須恵器の各器種や馬具の一部・純銀製の耳環などもあり、古墳の年代や被葬者の性格を考える上で、いくらかの手がかりにはなりうるものと思われる。

2　土器（第31図、図版12）

a　須恵器（46～68）

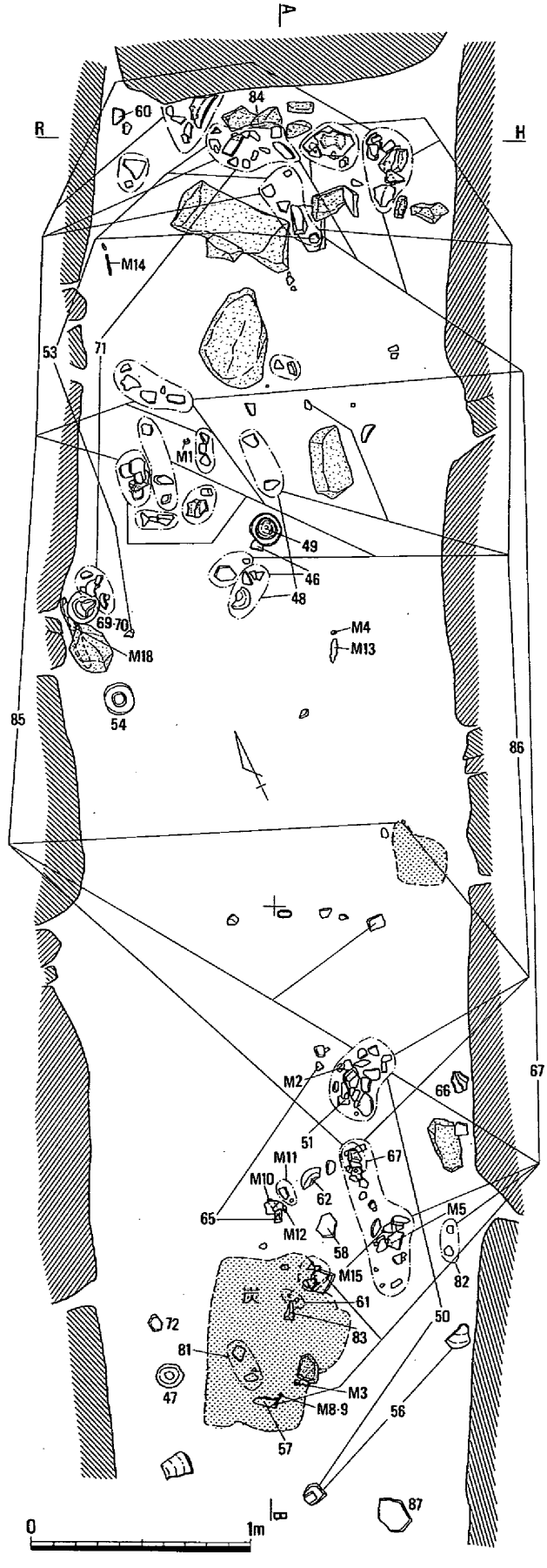
蓋杯（46～53）　**46**・**47**・**49**・**52**は完形で、焼成は**52**のみ不良である。蓋は体部と天井部との境で体部がわずかに内側へ折れている。天井部外面は**46**・**53**がヘラケズリ成形、**47**は未調整である。**46**の内面には仕上げナデが認められた。**46**は口径が114㎜、器高は38㎜を測り、**47**は口径104㎜、器高32㎜である。**53**は口径が90㎜で、短頸壺の蓋とみられる。杯は短い立ち上がりを貼り付けて受部を形成したものがほとんどであるが、**52**はやや丸みをもった底部から斜め上方に伸びる直口の杯である。底部

の調整は未調整で簡単なナデを施したものが多いが、**52**は底部の周縁をヘラケズリしたようで、その後にナデて調整している。**49**の底部内面にはかすかに仕上げナデが認められる。**48**は口径94㎜、器高37㎜で、**49**は口径96.5㎜、器高33.5㎜を測る。**52**は口径が129.5㎜、器高は45㎜である。

壺（54～58）　底部の破片が多く、全体の器形がわかるものは**54**の短頸壺のみである。焼成は**57**のみが不良である。**54**は短い口頸部が直立し、肩部に凹線を１条巡らせている。底部外面はヘラケズリ成形で、狭い底面を作っている。口頸部を半分ほど欠損していた。口径63.5㎜、最大腹径130.5㎜、器高85.5㎜を測る。**55**は直口壺の口頸部である。口縁部はわずかに内側へ屈曲し、先端を外反させる。口径117.5㎜と推測される。**56**～**58**はいずれも壺形をした器形の底部とみられる。**56**の外面はヘラケズリの後にナデて調整する。**57**の底面から底部外面にかけてはナデ調整が認められる。**58**は最大腹径を示す部分に凹線を２条以上巡らせている。底部外面はヘラケズリである。

甕（59）　小形の甕の口縁部とみられる破片が１点確認された。外反した頸部の上端に外傾する口縁部がつく器形とみられる。口縁部の下端には凹線を１条巡らせている。小片のため、口径や傾きは確実ではない。焼成は良好である。

高杯（60～65）　ほとんどが杯部の破片で、**65**は柱状部がわずかに残存していた。いずれも小形の高杯とみられ、口径は確実なもので88～104.5㎜を測った。どの杯部にも低い段状の突帯が巡らされている。焼成はすべて良好であった。**64**・**65**を除き、内外面に自然釉がかかってい

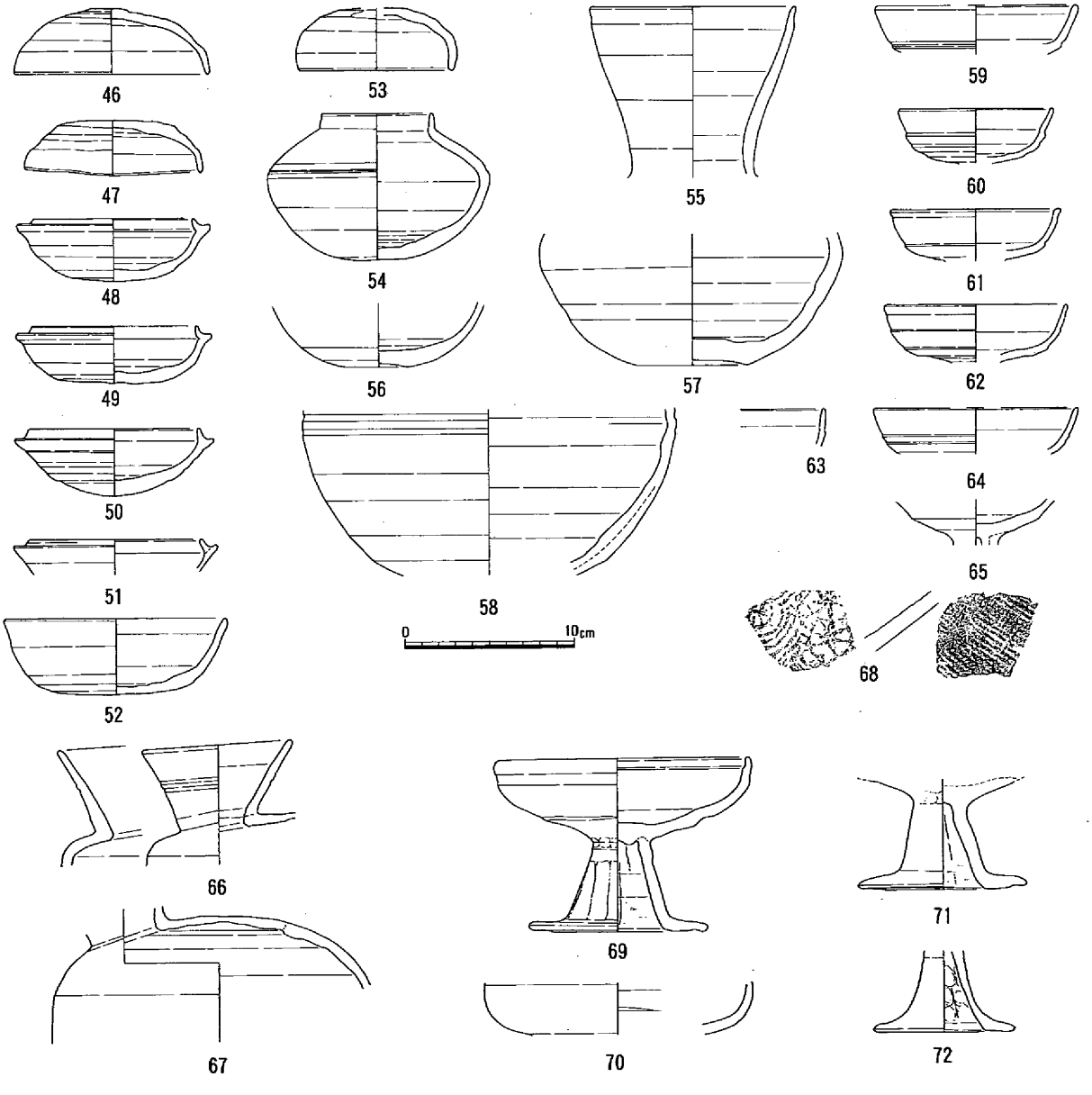


第30図　塚地古墳石室内遺物出土状態平面図(1/30)

る。**60**は2条の突帯が巡らされ、直口の口縁部はかすかに内湾する。**61**は杯の底部と体部との境に突帯が巡る。内湾ぎみの体部から口縁部は外折する。**62**は体部に2条の突帯が巡らされる。体部と口縁部との境がもっとも薄い。**63**は突帯が1条認められる。**64**も2条の突帯が巡る。突帯の間隔が狭い。**65**の杯底部内面には仕上げナデが認められ、外面はヘラケズリの後、ヨコナデで調整する。

平瓶（66・67）　いずれも破片にすぎないが、**67**は石室内の各所から出土した破片が接合できた。焼成は良好である。**66**の口径は86㎜と計測される。口頸部は直口で、口縁部の内面がかすかに内湾する。頸部に2条の凹線を巡らせる。口頸部と肩部の外面に自然釉が付着している。**67**は壺形の胴部の口を塞ぎ、中心から片側に寄った所に穿孔して口頸部を取り付けている。塞いだ部分の内面には指頭ナデが認められる。肩は**66**のようには張らず、丸味をもつ。

甕（68）　甕の胴部の破片が数点出土したが、内面に、同心円文タタキ目の中心に星形を刻んだ、車輪文タタキ目をもつ破片が1点あったので図示した。甕の破片は多く石室外から出土したが、この1点は石室内から出土した。外面は平行タタキ目で、カキ目によって調整されている。



第31図　塚地古墳出土須恵器・土師器(1/4)

b　土師器（69～72）

高杯（69～72）　出土した土師器片はすべて高杯のものとみられる。**69**は半完形で、**71**も脚部は完存に近い。出土位置から**70**と**71**は同一個体の可能性がある。色調は**72**が明褐色だが、他は橙色ないしはにぶい橙色である。**69**の杯部は底部が突出し、口縁部は体部から屈折ぎみに立ち上がる。口縁部の内面には凹線状の低い段が巡らされている。口縁部は強いヨコナデによって調整され、杯部の内面は平滑に整えられている。脚部の柱状部分は外面に面取り痕跡が認められ、屈折ぎみの裾部の先端はわずかに内湾している。脚部の内面はヘラケズリとみられ、裾部の調整はヨコナデである。口径146㎜、器高102㎜、脚端径104㎜を測る。**70**は杯部の破片で、底部は突出するように推測される。内面には工具が当たったような痕跡が認められ、工具を使用して平滑に整えたものとみられる。**71**は杯部の底部から脚部にかけての破片で、杯底部は接合面で剥離している。裾部は屈折し、やはり先端は内湾ぎみである。柱状部の内面はヘラケズリとみられるが、外面は剥落している。**69**～**71**の胎土には金雲母が認められる。**72**は小形で、胎土が前の3点とは異なる。裾部は屈折的にならず、下面は平坦である。脚部の外面は剥落して不明瞭であるが、ヘラミガキのようにみられ、内面には指頭圧痕が残る。

3　金属器（第32図、巻頭図版）

a　耳環（M1～4）

4点が出土した。**M3**と**M4**はほぼ同じ大きさで、対になる可能性が高い。**M1**は他の3点に比べると軸が細く、環径も小さくて違いがみられる。材質の面からも、**M2～4**が銅地金張りであるのに対し、**M1**は純銀製で異なっている。

M1は環の外径が19.5㎜を測り、軸の断面形は円形に近くて長径4.2㎜、短径3.6㎜である。表面は全面が錆びたためか光沢がなく、多孔質状を呈し、色調は灰紫色である。蛍光X線分析の結果、純銀製と判明した。重量は3.44ｇである。**M2**は環の外径が21.4㎜で、軸の断面形は楕円形を呈し、長径7.5㎜、短径5.3㎜を測る。銅地金張り製品である。鍍金がほぼ完全に残り、表面は金色に輝いている。切れ目の木口面には針穴状の小凹凸や小じわが認められる。重量は10.90ｇである。**M3**の環の外径は23.5㎜、軸の断面形は楕円形で、長径7.3㎜、短径5.0㎜を測る。銅地金張り製品で、表面には緑青がかなりみられ、色調は白金色を呈している。重量は9.69ｇである。**M4**は**M3**と対になるとみられ、環の外径が23.3㎜、軸の断面長径7.0㎜、同短径5.0㎜を測る。**M1**と対比するために**M4**も蛍光X線分析を実施し、鍍金部分については金、地金については銅という鑑定を得た。銅地金張り製品である。4点の内ではもっとも錆が進行していた。重量は8.38ｇを測る。

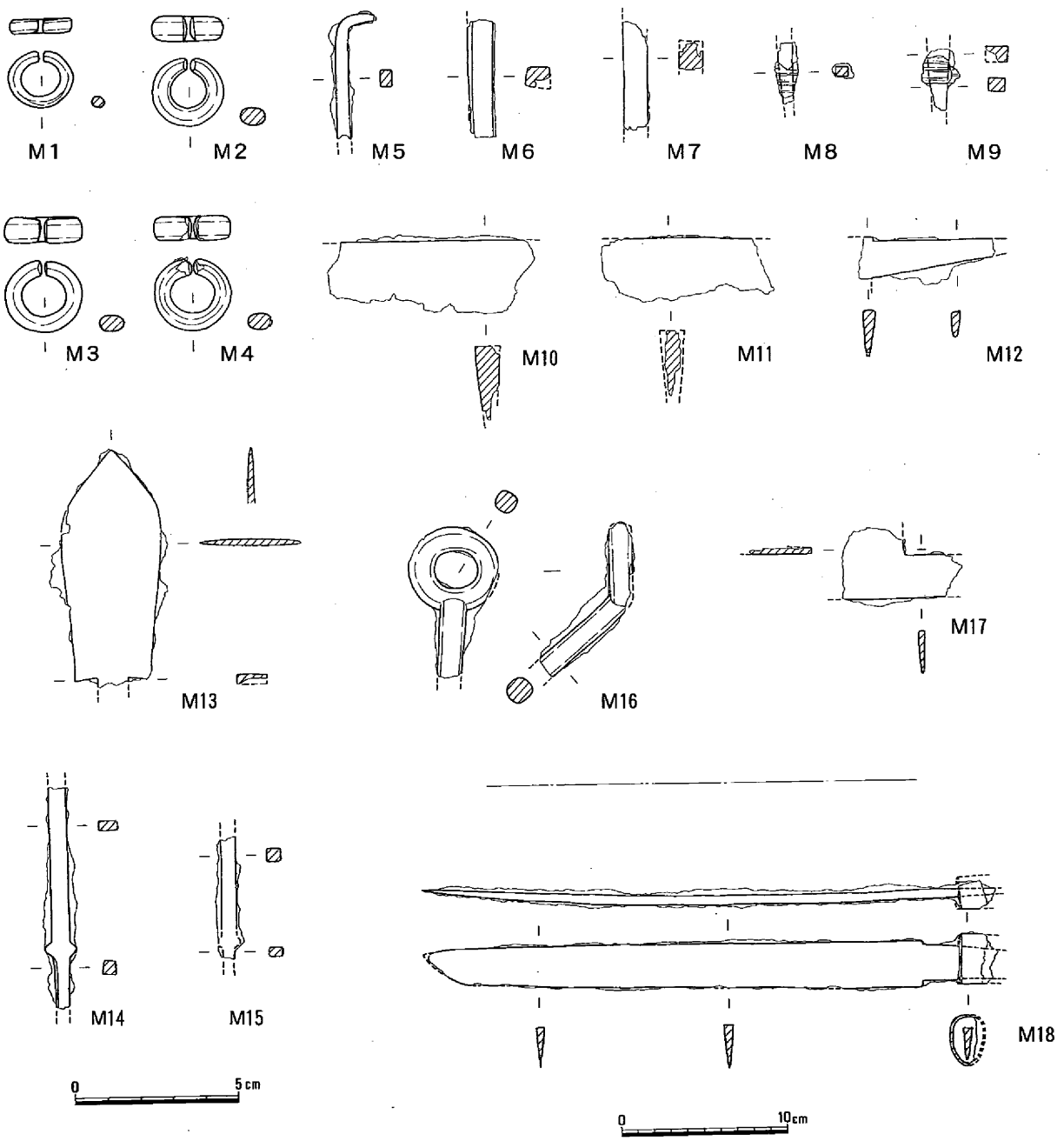
b　鉄釘（M5～9）

断面が方形の棒状品である。**M5**以外はすべて両端を欠損していて、**M8**と**M9**では木片が付着していた。木棺に使用された釘の破片ではないかとみられる。**M5**は一端を折り曲げ、断面形は長方形を呈し、幅5.2㎜、厚さ3.5㎜と薄い。**M6**は幅が8.0㎜、**M7**の幅は7.2㎜を測る。**M8・9**は先細りになっている。木片の木目方向は釘の軸線と直交している。

c　鉄刀・鉄刀子（M10～12・M18）

4点を図示したが、他に**M10**のような破片が数点出土した。**M12**は刀子、**M18**は刀であるが、**M10・11**については明瞭ではない。断面形から推測すると身幅は30㎜前後になるようで、刀の破片でもおかしくはない。

M10の背幅は8㎜と推定される。**M12**は刀子の茎とみられる。背側に段状の関をもつようである。茎は先細りで、背側にも、刃側にも面をもっているが、断面形は楔形を呈している。関部での幅は11㎜、背幅は4～5.5㎜を測る。**M18**は茎の先端を欠損しているが、身部はほぼ完存である。鋸の半分が装着した状態で残っている。身の表面には全面に木質が認められ、鞘に納められた状態で副葬されていたと考えられる。このことと鋸の存在から鍔が出土しなかったことが疑問に思われる。あるいは盗掘時に破損を受けたものであろうか。身は残存長が298㎜、幅は27㎜を測り、背幅は5.5㎜である。刃側も背側もほぼ直線的であるが、切っ先付近で背側が内湾する。関は背と刃の両側に段が作られている。茎は断面実測部分では断面形が三角形を呈している。鋸は厚さが2㎜で、断面の外径は長径が31㎜と推測される。**M12**の重量は5.25ｇ、**M18**は192.87ｇである。



第32図　塚地古墳出土金属器(1/2・1/4)

d　鉄鏃（M13～15）

３点が確認された。**M13**は平根式の鏃身部である。柳葉式で棘は直角に近いが、棘と茎のなす角は鋭角となる。身の長さは70㎜、幅が30.5㎜、厚さは２㎜を測る。全体の重量は14.91ｇである。**M14・15**は尖根式の長頸鏃の破片とみられ、箆被と茎の境に小さな突起の棘をもっている。茎は箆被より細い。**M14**の箆被の断面形は長方形だが、**M15**のそれは正方形に近い。

e　馬具（M16）

轡の引き手の一部が出土した。石室内の攪乱状況から推測すれば、轡以外の馬具が副葬されていた可能性は高い。**M16**は鉄製で、軸の先端は円環になっている。軸と円環は鈍角をなしている。軸も円環もその断面形は隅丸の方形に近い。軸の断面形は7.0㎜×7.5㎜、円環の断面形は6.5㎜×6.5㎜と、円環部が細い。円環の外径は27.5㎜を測る。

f　不明鉄製品（M17）

鈎形をなすかと思われる鉄製の板状製品である。図の右半分、幅13.5㎜の部分の断面形は楔形を呈している。厚さは２㎜を測った。身の中央に三角形の穿孔をもつ方頭の鏃ではないかと考えたが、大きすぎるようである。重量は3.60ｇを測った。

4　弥生土器（第33図）

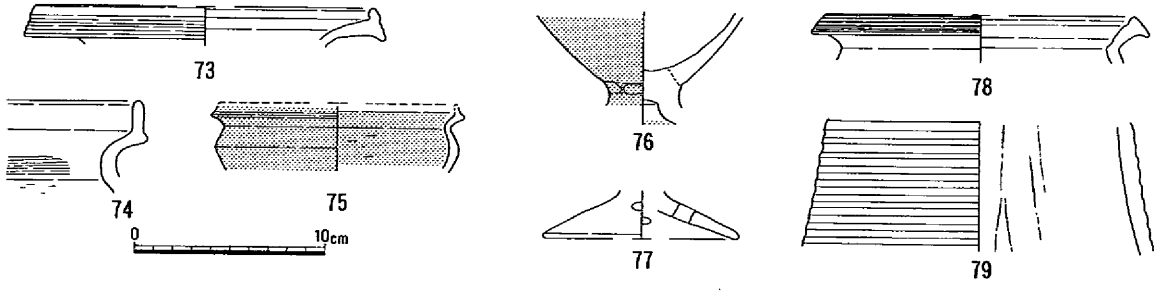
塚地古墳周辺からも弥生土器が出土した。道面遺跡から流出したものとみられる。**73・75・78・79**は石室の掘り方埋土中から出土し、**74**は古墳築造前の堆積土中、**76・77**は古墳の封土中出土である。

73・74は壺の口縁部である。**73**は大きく外反する口縁部の端を上下に拡張し、端面に凹線を巡らせている。**74**は口縁部を上方へ立ち上げている。**75**は鉢で、口縁部は上方へ摘み上げている。**76**は脚が付き、椀形の高杯かと考えられる。杯の内面は剥離しているが、外面と脚の内面には丹が塗られている。脚部の接合は差込式である。杯部の下端には指頭圧痕が巡る。**77**は短脚高杯の脚部とみられる。**78**は甕の口頸部である。口縁端部は下方へ拡張させ、端面には凹線を飾っている。口頸部の内面には２条の凹線状のくぼみが巡る。**79**は器表の剥離が著しいために外面の施文が凹線か沈線か明瞭ではないが、大きさからすれば器台とみられる。内面には絞り痕跡が認められる。

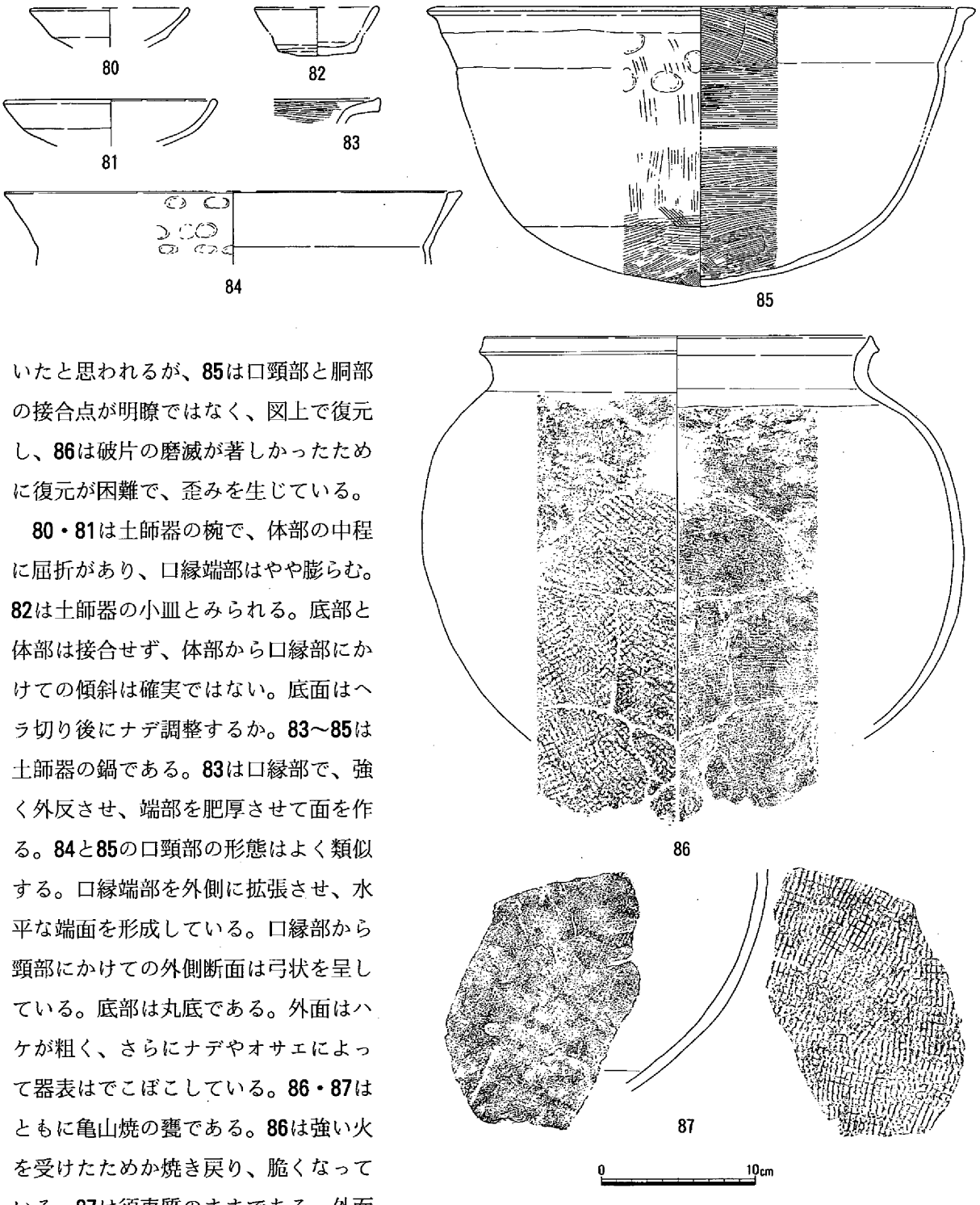
土器の年代は、**79**が器台とすれば弥生時代中期後葉とみられ、ついで**73・78**が後期前半、**74～77**は後期後葉と判断される。後期後葉のものが多数を占めるのは道面遺跡と同様である。

5　中世土器（第34図、図版12）

８点の中世土器を図示したが、小破片が多かった。**85・86**については完形に近い状態で廃棄されて



第33図　塚地古墳出土弥生土器(1/4)



第34図　塚地古墳出土中世土器(1/4)

いたと思われるが、**85**は口頸部と胴部の接合点が明瞭ではなく、図上で復元し、**86**は破片の磨滅が著しかったために復元が困難で、歪みを生じている。

80・81は土師器の椀で、体部の中程に屈折があり、口縁端部はやや膨らむ。**82**は土師器の小皿とみられる。底部と体部は接合せず、体部から口縁部にかけての傾斜は確実ではない。底面はヘラ切り後にナデ調整するか。**83～85**は土師器の鍋である。**83**は口縁部で、強く外反させ、端部を肥厚させて面を作る。**84**と**85**の口頸部の形態はよく類似する。口縁端部を外側に拡張させ、水平な端面を形成している。口縁部から頸部にかけての外側断面は弓状を呈している。底部は丸底である。外面はハケが粗く、さらにナデやオサエによって器表はでこぼこしている。**86・87**はともに亀山焼の甕である。**86**は強い火を受けたためか焼き戻り、脆くなっている。**87**は須恵質のままである。外面は格子目タタキで、内面はハケによって調整されている。**87**では内面に円形のくぼみがみられ、当て具の痕跡と考えられる。直立ぎみの頸部から口縁部は軽く外反し、口縁端部は上下に拡張されて傾斜した端面をもつ。

土器の年代は大きく二時期に分かれる。**80～83**は13世紀から14世紀にかけての鎌倉時代のものとみられ、**84～86**については16世紀前半の室町時代後期のものと考えられる。塚地古墳はすでに鎌倉時代には盗掘を受けていて、16世紀前半に溜池の築堤作業に伴って大規模な攪乱を被った可能性が高い。

第5章　まとめ

第1節　道面遺跡について

道面遺跡は丘陵尾根筋から南側斜面にかけて立地する弥生時代の集落跡で、発掘調査を実施したのはその西端部分にあたっていた。出土遺物から判断すると、集落は後期後葉に形成されていたと考えられる。しかし、第2地点からは中期後葉の土器がまとまって出土し、集落の未調査部分がかなり広いとみられることから、その時期にも集落が存在していた可能性がある。また、後期前葉の土器も貯蔵穴1の土器溜まりからわずかに出土していて、かなり長期間にわたって集落の形成と廃絶を繰り返していたことが推測される。竪穴住居1・2が建て替えられていたことからすれば、後期後葉の中でも一世代程度は継続していたと思われる。

尾根筋を一つ隔てて北東に隣接する段林遺跡（註1）は、やはり弥生時代後期後葉の集落跡であったが、中期中葉の土器片も多く出土し、発掘調査地区に近接して中期中葉の集落が存在していたものと推定されている。段林遺跡からは中期後葉の土器は出土していないため、道面遺跡との間で集落の移動があった可能性も考えられる。ただ、鴨方町周辺では中期後葉から山上の阿部山遺跡や竹林寺天文台遺跡など遺跡が急増するため、道面遺跡が新しく作られた集落であることも考えられる。丘陵裾にあたる鴨方川水系の平野部に面していた益坂の向原遺跡（註2）からは中期後葉と後期後葉の土器片が出土し、和田遺跡（註2）では後期後葉の貯蔵穴が検出されている。弥生時代も終末を迎えると、平野部にも丘陵上にも集落が林立するようであり、この地域における弥生社会の順調な発展を示しているようである。やがて、これらの集落の組織化の中で、和田遺跡で検出された、特殊器台を供献されるような木棺墓の被葬者に代表される首長層が台頭してくるものと考えられる。

第2節　塚地古墳について

塚地古墳の所在する本庄川から鴨方川にかけての流域では、この矢掛寄島線改良事業や山陽自動車道建設に伴って5基の古墳が発掘調査され、この地区における古墳時代の実態を知るための資料が蓄積されている。ここではこれらの調査結果を比較しながら塚地古墳の歴史的な位置づけを試みたい。

塚地古墳の特徴をまとめると次のようになる。埋葬施設は横穴式石室で、その規模は全長6.6m以上、幅1.8mあり、この地方では大形の部類に属する。石室の平面形は片側胴張りの無袖式で、石室上部の持ち送りはほとんど認められなかった。副葬品の中では純銀製の耳環や馬具が注目される。

まず、塚地古墳の年代的な位置づけであるが、出土した須恵器の蓋杯の口径は、蓋が104～114㎜、杯は立ち上がりをもつもので94～96.5㎜を測る。隣接する段林古墳（註1）出土の須恵器蓋杯では、蓋が150㎜前後、杯が130㎜前後と塚地古墳出土品よりはかなり大きい。同じく地頭上の宮の脇古墳（註2）出土品では、須恵器蓋が口径130㎜と前二者の中間にある。益坂の阿坂古墳（註2）出土須恵器蓋杯の口径は古式の2点を除き、蓋が90～114㎜、杯が84～120㎜と幅があるが、塚地古墳出土品に

近い値を示している。一般に口径の縮小は時代の流れに沿っているため、段林古墳から宮の脇古墳、そして塚地古墳・阿坂古墳という年代順序は小林利晴も指摘する（註１）通りである。

次に横穴式石室の構造をみてみると、塚地古墳の石室がもっとも整っているのが理解される。塚地古墳の石室は奥壁が一枚石で、側壁では一段目に長径が200㎝程度の大石を並べ、二段目から三段目とじょじょに石が小さくなっている。各段の上面はほぼ揃っている。これに対して、段林古墳では奥壁が３個以上の石からなり、側壁の一段目は奥の石のみが大形で、他は小形の石を使用し、その上端は揃わない。阿坂古墳の石室も奥壁は複数の石からなり、側壁の一段目の石は長径が60～150㎝の石が不規則に並べられ、その上端は揃っていない。宮の脇古墳は石室が抜き取られていたが、石材の抜き跡から石室の復元がいくらかは可能で、それによると奥壁は一枚石の可能性が高く、側壁の一段目の石も長径が100㎝以上の大形の石を並べていたようである。片山２号墳（註３）の石室は全体像を知ることができないが、側壁には小形の石が不規則に積まれ、段林古墳との類似が認められる。いずれの石室も無袖式とみられるが、阿坂古墳は片側の側壁が胴張りを呈し、塚地古墳の石室とよく似る。

このようなことから、横穴式石室を二つに類別することができる。一つは段林古墳・阿坂古墳・片山２号墳で、小型の石材を不規則に積み上げたもの、いま一つは塚地古墳で、大形の石材を規則的に積み上げたものである。宮の脇古墳も石材の抜き取り跡から判断すれば、塚地古墳の仲間とみられる。これに石室の規模を重ねてみると、前者では石室の幅が段林古墳では奥壁1.1ｍ、阿坂古墳は奥壁1.3ｍ、最大1.7ｍ、片山２号墳で１ｍあり、後者の塚地古墳は奥壁1.6ｍ、最大1.8ｍ、宮の脇古墳で最大1.8ｍを測り、両者で明瞭な格差が認められる。前者の阿坂古墳と後者の塚地古墳の石室床面は胴張りの形状で類似していたが、これについては年代的な共存を示すものかもしれない。

それぞれの古墳の副葬品の中では、宮の脇古墳の金銅装大刀と金張りの銅釧が特殊であり、塚地古墳の純銀製の耳環と馬具も一般的なものではない。また、両古墳ともに釘が出土していることも注意される。この二つの古墳は石室の類別ではともに後者に入り、石室規模も大きかった。したがって、宮の脇古墳と塚地古墳の被葬者は他の古墳の被葬者より階層的にはより高い地位にあったと考えられる。年代的には宮の脇古墳は６世紀末から７世紀第１四半期、塚地古墳は７世紀の第１四半期から第２四半期にかかるとみられる。鴨方町内では、六条院東の四条原周辺にも後期古墳の集中がみられ、石室幅が２ｍの天神山塚古墳や1.75ｍの向ヶ市塚古墳などが所在している。宮の脇古墳や塚地古墳の被葬者は本庄川から鴨方川にかけての地域を代表する立場にあり、四条原の地域を代表する者と同等の地位にあったとみられる。塚地古墳の被葬者は宮の脇古墳の被葬者の地位を継ぎ、塚地古墳の横穴式石室はこの地域における最終末の横穴式石室の一つと考えられる。地頭上の八幡塚は竪穴式石室を埋葬施設にもち、７世紀末の土器が出土したと伝えられる（註４）。塚地古墳の被葬者を継ぐ者の墓であろうか。

註

（１）小林利晴・内藤善史『段林遺跡・段林古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告132　岡山県教育委員会　1998年
（２）伊藤晃・浅倉秀昭・江見正己『山陽自動車道建設に伴う発掘調査２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42　岡山県教育委員会　1981年
（３）平井　勝「鴨方町片山古墳群の発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10　岡山県教育委員会　1980年
（４）間壁忠彦「第二章　郷土のあけぼの」『鴨方町史』本編　鴨方町　1990年

報告書抄録

ふりがな	どうめんいせき　つかじ　こふん
書名	道面遺跡・塚地古墳
副書名	県道矢掛寄島線改良事業に伴う発掘調査
巻次	2
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	147
編著者名	岡本寛久
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-0824 岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL 086-224-2111
発行年月日	西暦1999年11月30日

ふりがな 収載遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
道面遺跡 塚地古墳	岡山県浅口郡 鴨方町地頭上 1444－2	33443	6 —	34度 33分 50秒	133度 35分 50秒	19981101 ～ 19990114	380㎡ 160㎡	県道矢掛 寄島線改 良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
道面遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居2軒・柱穴列1条・貯蔵穴1基	弥生土器 石鏃	丘陵上の集落の一端を検出
塚地古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室1基	須恵器・土師器・轡・刀鏃・耳環（金銅・純銀）	古墳時代末期の大形石室古墳

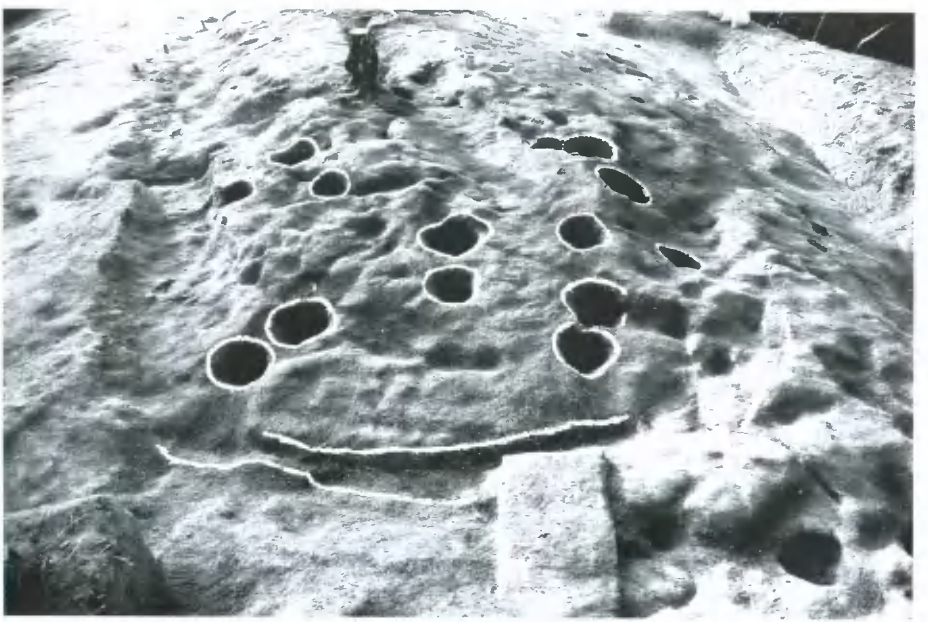
1　遺跡遠望（北西から）

2　段林地区（左）・塚地地区（右）遠望（北西から）

3　調査前全景（東から）

図版２　　道面遺跡

１　調査区東半全景（南西から）



２　竪穴住居１（東から）

1　竪穴住居２（北西から）

2　貯蔵穴１検出状況（上　南東から）・完掘状況（下　西から）

図版４　　道面遺跡

１　柱穴列１（北西から）

２　土器溜まり１（北西から）

３　土器溜まり２（北西から）

6

12

1　貯蔵穴1出土土器

21

22

25

24

26

27

35

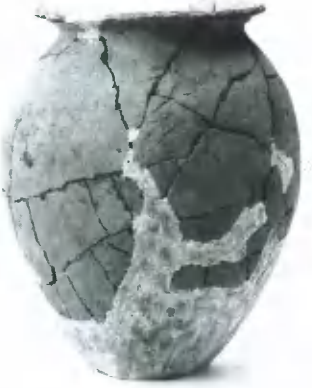
2　土器溜まり1出土土器

29

31

1　土器溜まり１出土土器

38


40

39

41

2　土器溜まり２出土土器

42

20

S１

S２

3　道面遺跡出土土器・石器

1　調査前全景（上　西から・下　北西から）

2　古墳全景（北から）

図版８

塚地古墳

1　天井石（東から）

2　調査区西壁土層（南東から）

3　石室掘り方全景（北から）

1　石室掘り方細部
（北東から）

2　横穴式石室東側壁
前方（西から）

3　横穴式石室西側壁
前方（東から）

図版10　　塚地古墳

1　横穴式石室奥壁
（南から）

2　横穴式石室東側壁
（南西から）

3　横穴式石室西側壁
（南東から）

1　石室内奥部遺物
出土状態（南から）

2　石室内前方部遺物
出土状態（北から）

3　土師器高杯・鉄刀
出土状態（東から）

塚地古墳

46

47

48

49

52

53

54

55

62

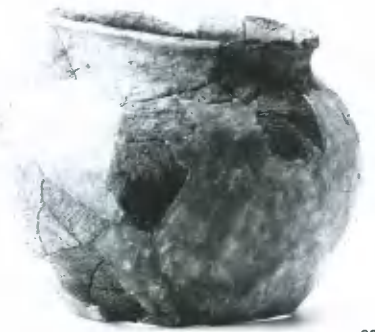
66

69

67

71

85


86

1　石室内出土土器

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 147

道面遺跡・塚地古墳

県道矢掛寄島線改良事業に伴う発掘調査 2

1999年11月15日　印刷
1999年11月30日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印　刷　株式会社 三門印刷所
岡山市高屋116-7